1983

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十四年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

京城雜筆

永樂町人　編輯

拾一月號

【第八十一號】

丸一吳服店へお遊びを願ひあげます。新築成ると共に、どんなに面目を一新して居りますか。流行物を選び、内容を詮議し、價格を吟味し、信用第一主義を以て皆様をお待ちしてゐます。どうか安心して丸一へおはこび願ひあげます。

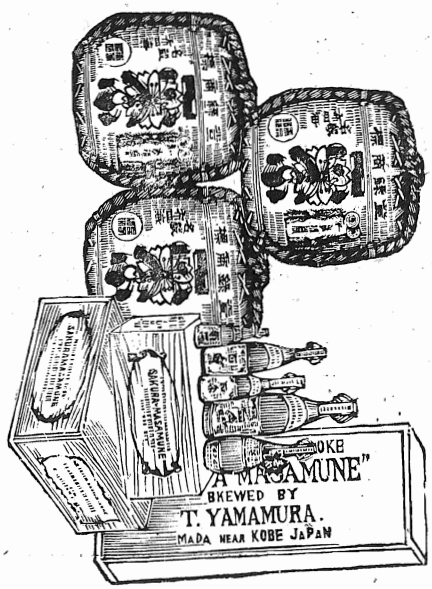
京城本町二丁目

丸一吳服店

電話本局 六三五番 一〇九一番 二三六五番

京城支店

山邑酒造株式會社



官製食卓鹽

朝鮮總督府專賣局製造の本品は理想的經濟的の調味料で文化生活に缺ぐべからざるものであります

京城府南大門通二丁目九七九八

發賣元 富田商會

長電話本局三三〇九番
振替京城四五六八番

徳用大瓶小型振出瓶等數種の美しい瓶入で價格低廉です是非御使用願ひます

均質牛乳

牛乳界の大革命

日本最初の試み

均質牛乳の特徴は

脂肪を粉碎して居ります故に消化が宜しく風味の佳良と獸臭のない事は一度召上つた方には直覺せられます長らく腐敗しませぬから小兒や病人の方々にはこの均質牛乳に限ります品質本位でありますから値段の競爭をせないのは弊場の主義生命であります。

朝鮮總督府病院特定御用
陸軍衞戍病院御用
京城府內各病院御用

平山牧場

電話光化門一三三番
京城東小門外

金剛山産松實松花應用菓

金剛飴

金剛柏子（松の實鹽炒り）
金剛柏子菓（朝鮮式松の實菓子）
金剛おこし
金剛しるこ

金剛煎餅
金剛羊羹
金剛饅頭
金剛山

京城本町二丁目
電話二十七番
本局四七五番
龜屋商店

拾一月號目次

（大體原稿到着順に依る）

旅の味……遞信局事務官　堂本貞一氏
金一封の氣持……朝鮮新聞社會部長　野崎眞三氏
氣の向いたまゝ……中央金鑛重役　深尾道恕氏
漫談……鐵道局營業課　鉅鹿曉太郎氏
曹人愚語……覆審法院判事　伊藤憲郎氏
無題……一番ヶ瀨病院長　一番ヶ瀨慶次郎氏
東京の芝居見物……李王職次官　篠田治策氏
京城南山の梵鐘……遞信局監理所長　松島惇氏
歌の話……野田醬油支店長　市山盛雄氏
思ひ出……總督府囑託　松田學鵬氏
雜想……木浦　福田有造氏
旅の提燈を讀む……京城婦人病院長　工藤武城氏
皇道即孝道……京城師範學校長　赤木萬二郎氏
廣告外交……京城廣告雜誌社　石川久臣氏
秋日雜記に寄す……東京　丸山鶴吉氏
眞の雜筆……渡邊病院長　渡邊晋氏
捨て石……朝鮮佛教主幹　中村健太郎氏
雜筆を讀んで……朝鮮及朝鮮人主筆　柄澤四郎氏
晩秋獨語……今村鞆氏
供養……大阪毎日新聞支局長　井上收氏
歸省雜記……辯護士　榎本隆氏
南洋漫筆……總督府囑託　市村毅氏
紅焰萬丈……廣江澤次郎氏
戀なき文藝……毎日申報記者　朴尙僖氏
お俊傳兵衞……西本願寺布教使　大島智昌氏
演劇禮讃……植村病院長　植村俊二氏
第一印象……本町しらぎや主人　安達清太郎氏
都市の美化……專賣局事務官　高武公美氏
非常線……京城佛教慈濟會　小水眞二氏
戻り路……總督府醫院皮膚部長　廣田康氏
忘れ得ぬ野球戰……商業通信編輯長　西本量一氏
本ブラ漫記……漫畫家　笠原ふみを氏
臥雲臺の秋……殖產銀行調査役　中島司氏
朝鮮へ賣られ行く女……朝鮮ホテル　伊藤龍氏

旅の味

堂本貞一

學生時代のことであつた。

冬の日の晝食後、クラスの連中がストーブを取り圍んで雜談に耽つて居る内に、誰れかが一萬圓呉れる人があつたら何に費ふかと云ふ質問を提出した。

一と頻り此の解答に花が咲いて甲論乙駁、モウ、現金が眼の前に轉がつて居るかのやうに話は眞劍味を帶び、文字通り口角泡を飛ばした末、衆議は、其金を旅行に費すと云ふ事に一致して愚が着いた或る人の歌に

若き日のつたなきしわざ今更に筆にするまでなりにけるかな

と云ふのがあるが、右のやうな笑話も、なつかしい若き日の思ひ出での一つとなつた——などと言へば、としよりじみて聽こえるかも知れぬが、俗事に追はれて其の日を送る今の身の上から學窓にあつた日を顧みると遠い昔の全く別な世界のことのやうに思はれる。

しかし、旅行に增すたのしみは無いとの考は今も昔と變らない。百聞不如一見と謂つたやうな功利觀や、靑山入夢と謂つたやうなあつさりしたところからそう思ふのではない。

自由に人を見、國を見、そして自然に親しむ。其處に、いつとはなく、また、どうしてともなく、しかも、たしかな、かたい、自分の姿が摑めて來るやうに思はれる

今でも、私は、財布と時間との餘裕さへあれば、旅行したいと思つて居る。能ふれば人にも旅行させたい。自分の子供も、旅行に堪えるだけに成長したら出來るだけ旅行をさしてやりたいと考へて居る。

石川欣一氏の『旅から旅へ』の中に『旅する心』と題して同氏が紐育で知り合ひになつた、世界を漂浪して歩いた米國西部生れのハリイと云ふ男の思ひ出を書いてあるが、その中にハリイをして、次のやうに語らせてある。

『さうか。お前には俺の旅する心が分らないのか。勿論、新しい所、珍らしい所を見度い好奇心も原因してゐるが、本當に好奇心なんか全く二の次なんで、俺は滿足（コンテントメント）を見付て世界中歩き廻つたのだ、あゝ此所なら何をしても氣持よく出來る。只呼吸してゐる丈でも愉快である。とかう何か心がのんびりと、滿足してゐられる所を見付けに行つたのだ、だけど何所へ行つても駄目だね、初め二三週間はそんな氣がする場所も、やがて暫らくするともう氣が落付かなくなる。何か不滿足になる。職業の方の關係から半年一年とゐはするものゝそれは、苦痛と不滿足とを無理に我慢して

〔二〕

の上である。そこで最後に俺はかう云ふ事に到著した。要するに人間は自分の心の中に滿足の家を建てなくては駄目である。心に不滿があれば、何所で何してゐても人間は不幸である。』

と、これも旅の大きな收穫の一つではなからうか。

本年の初秋、西鮮を旅行しての歸途、開城に立ち寄り、彩雲洞に登り、裏から北漢山を眺めながら數名の一座で色々の物語りに耽つたが、話題は竟に旅行のことに移り。座にあつた金氏が旅順の戰跡を視察した時の思ひ出を語り、當時の雅懷を低誦し、書家黃氏筆を振つて之を書した。曰く、

萬古形勝天下無、鐵壘重々列雄圖
鷄冠山上風蕭冷、三十年來始認吾

高麗朝以來、詩家の系統と稱する禹氏、大に此の結句を賞し、盛に、其の吾を認めた因由を肘度したが、金氏默して應じなかつた。

私はひそかに旅行の味ひは其處にあると思つた。

◇聲曲風聞記

吉田莊一

釜山では、三巨頭の一人といはれる迫間君が、ヒドク義太夫に力を入れる▲大邱では、病院長の松井繁正君がこれ亦た見臺を叩いて、半白のあご髯を三尺も突き出し、調子につれて、それを前後左右に回轉することが、大好きと來てゐる▲隨つて、この兩地は、義太の勢力仲々旺盛▲が、それが平壤となると、全く長唄の天地、その音頭とりはいふまでもなく松井民次郎氏、それに大櫨氏がある▲で、平壤では、猫も杓子も『旅のころも』でうつゝを抜かして居る。

京城雜筆

金一封の氣持

野崎眞三

新聞關係者で所謂金一封の經驗のない人はないであらう。或る人は失禮だと擲げつける、或る人は妙な金は受取れないと拒絶する、或る人は恐る〳〵受取る、或る人は知ラン顔の半兵衛で納める、或る人は感謝して頂戴する。受けるか拒むかの違はあれ、此金一封を出された經驗のない人は居ないと斷言してもよい。大阪新聞では新聞記者の權威を失墜すると稱して支局長が嚴重に監督監視し金一封授受を避けしめてゐる。金一封は新聞記者墮落の第一歩だと斥けて居るが果して新聞記者は毒されるであらうか。

◇

金一封にも種々ある。出す側にすれば謝禮として喜んで出す場合嫌々ながらも後難を恐れて出す場合、五月蠅いから口塞げ擊退策として出す場合、義理ヅクメで筆を封ずる場合、黑を白とする藥の意味で出す場合、何等特別な意味もなく好意的の場合、盆暮の御贈物手土産の場合もある。受取る側にすれば斷乎として拒絶し、虚欺を書く事を恐れて拒む、職務上に毫末も無影響として受取る、當然の報酬として大ビラで受取る種々の心持で此金一封が授受されるのだから面白い。金一封も御馳走政策も時に飛んだ虻蜂取れぬ場合を招來するものである。

◇

所謂新聞記者と稱しても金一封專問の朦朧記者もある。次から次へ金一封を貰ひ續けて生活して居る記者もないではない、現に月俸百圓なり百五十圓なりの確定的な月收のない記者は、金一封なしには生きて行けないのだ。聞く處に依ると月給が一二箇月滯る新聞が市内にもある相である、月給が貰へなくも生きて行く裏面には金一封が米代となるのは當然だ。惠まれて居ない新聞記者が金一封の前に叩頭するのは當然過ぎる事實であらう。出す側は此種の新聞記者には文句なしに確定的に出して遣るが良いと思ふ。

◇

何等特別に意味のない金一封が世痴辛い今日有り得るかと疑ふかも知れぬが、聰明な一部にはある金一封であるか御馳走であるかは別として平素から御懇親を願ふ意味だ、此種の者は現在ドンナ大新聞でも受けて居るらしい。次が盆暮の贈物と手土産、之も平氣で授受されてゐる、面白い挿話がある——某君は新任なので事情が分からず總督府から御歳暮が出ると聞いて師走の或る日秘書官室に出頭して物笑となつたソウナ。

◇

金一封を强要するものもある。强要は許すべからざる不道德であり或る場合犯罪をすら構成する、社會の公器を私し弱味に乘ぜんとするゴロツキ新聞記者は之を社會から退らねばならぬ。又經濟關係其他に於いても公器を私して妙な金儲を助成するが如きも、斷じて許す可からざる不德漢である。白を黑くする意味の金一封を受取つて、白の儘である事は不德かも知れないが、白である事が眞實の場合は許されると思ふ。批判の中に金一封を勘定せぬ事は正しい事である。

◇

批判の中に金一封を勘定せぬ事は非常に困難な事だ。然し公私を混淆せぬ正義の觀念が高潮してゐれば左程困難でもない、けれども金一封の精神を裏切る事は不愉快なので、此不愉快を豫想して受取るのも良くない。私の金一封に對する信條は相手方が喜んで出し受けて喜ばしいブルヂヨアーの金一封は堂々と受けて差支ないと信ずる。（一〇、三）

◇東小門遊記

石川利夫

一日、東小門外を散歩して、平山牧場を訪問すると、主人公大喜びいろ〳〵歡待してくれた上、牧場や機械工場を見せて貰ふ▲先づ牧場の廣いのと、放牛の多いのと、器械設備のスツカリ整つて居るのに感心した▲僕は今度始めて均質牛乳の講釋を聞いたが、ナル程この均質牛乳なら、不消化と、下痢の心配のないワケだと合點が行き僕も餐囊をハタいて、これから一合宛づ飲むことにした。

〔三〕

京城雜筆

氣のむいたまゝに

深尾道恕

四日に私は山から京城に歸りました、すると總領の娘が『東京のおぢいさまは風雅なかたですか』と聞く『どうしてか』と尋ねると『京城雜筆』におぢいさまは俳人で風雅な人だと出てゐますと云ふ留守中に屆いてゐた雜筆を見ると果して其の通りの記事がある、私は思はず大笑した、成程私の父は『ハイジン』だ、然し同じ『ハイジン』でも『ハイジン』が違ふ、何時か私は松本君かだれかに私の父は『ハイジン』だといつたことがある樣に思ふが『俳人』でなくて『廢人』なのだ、十年も眼を病んで九分九厘まで盲目である、平素から物事を理屈でばかり見る質で俳や詩を理解することの出來ぬ人である、風雅な事とは頗る緣が遠い、今でも怠らず治療を加へてゐる、現に先日も入院中であつたが、一向効驗はないらしい、雜筆の記事が識をなして『廢人』か『俳人』になつて呉れればよいと祈る目は見えなくとも風雅を解する程心に餘裕があつたら仕合せと思ふ

◎

私は此のごろ主として山で暮すそうして時々京城に來る、成歡から事務所のある良巒まで三里の田舍道をこの夏以來何度往復したことであらう、住居は部落を離れた山の中腹にあつて、山の中の建物としては立派な西洋館だ、私はその一室に疊を敷いて寢起きをしてゐる、こう云へば如何にも好い樣だが、何年の間か人の住まなかつた空屋だから隨分荒れたものだ、家の前は大豆や蕎麥、高粱の畑で畑でない處は草が丈高く茂つてゐる、畑には澤山な柿の木がある、その色づいた葉、赤い實、時折畑に立つ人、風に搖らぐ高粱、こん風趣は京城の町中では到底も味はえぬ、山の秋は存外氣味がよい、然し困るのは家に便所と風呂のないことだ、風呂は無精ものゝ私には我慢も出來るが、便所丈はなくてはすまぬ、朝早く露のおりた草原に出掛けて、然るべくやる、大德の糞ひりおわす所ならば兎も角大俗にもなれぬ凡俗の私のすることでは畫にも句にもなり樣がない京城まで我慢し通して用をたした事もあつた、洗石に其時の氣持は好かつた、十日程前にアンペラ圍ひの便所と野風呂が出來たが西洋館とは奇異な對照だ、此頃では野風呂は聊か寒い、雨が降つたらアンペラの便所は用をなすまい、創業時の鑛山、大抵這な事であらう

◎

電車の中で人に逢ふ『いつお越しになりましたか』『二三日前に歸りました』『お宿はどちらですか』『イヤ家族は皆こちらに居ります』妙な問答だ、客が來た『いつ山にお出掛けです』『サア明日でも山に歸らうと思つてます』客と妻とが『山に歸るなんて云はないでも好いでせう』と笑ふ、京城と良巒との間を屢々往復する、往くのだか、歸るのだか、自分にも解らない、蟹の樣なものだ、今に私もあなを掘る、そうしてあなを出たり這入つたりすることだ。

◎

青化精錬と云ふ收金法がある、鑛石から金を採ると鑛尾と云ふ砂が殘る、その砂を大勢の人夫の手で天日に乾かす、乾いた鑛尾の砂は人夫の手で五六十噸も這入る大きな『タンク』の中に投入される、こうした『タンク』が六ツ並ぶ、青酸加里の溶液が『ポンプ』で六ツの『タンク』に注入される、青酸加里の溶液は鑛尾の中の金粒を溶解して、金液が順次亜鉛を入れた箱に流れる、そうして亜鉛に金粒が附著する、こんな作業を繰返して一週間もすると亜鉛に附著した金粒を採つて之を溶解して地金を採る、もとの鑛尾の量は三百噸を超えるが、採れた地金の量は僅かに食パン半斤の嵩にも及ばぬ、なんと云ふ中味の少いことであらう、あれ程の莫大なものも中味はこんなに少いものかと私は何時も妙に思ふ。

◇義太夫の話

平田久雄

今は長唄の時代だといふが、それでも義太夫は、決してすたつた譯ではない▲後藤虎雄君などは『ヨンナ時勢には、先づクヨ〳〵せずに、義太でも唸つてゐるんだナ』と、大に時代を達觀して、日日稽古を勵んで居る▲それに、清水組の藤井さん、池田長次郎君、志岐高橋、大村などいふ巨頭がある。

京城雜筆

漫談

鉅鹿曉太郎

金君は某官廳の自動車運轉手である、或る日其のハンドルを握る後方から話しかけて見る。

『見習の黄は試驗に合格したかね』

『實地は通つたのですが、學科で落第しました』

『學科て何をやるのだい』

『道路取締規則、自動車規則それに自動車の分解各部の名稱、使用、目的、方法等です』

『厄介なものがあるのだね、黄も中々通過困難だね、其處へ行くと君達は早く取てよかつたね』

『處が我々も四年に一回試驗があるのですから滯切れませんよ』

『此奴あ驚いたな、僕は四年も經驗が積むと上手にこそなれ下手にはなるまいと思ふがね』

『此七月に八十人二度目の手合が受驗しましたが僅に二十人しか合格しません、來年の七月で免狀の期限が切れますから不安でなりません』

『矢張り以前の合格者は素質が落ちるから試驗で篩ひ落とす肚だろうかね』

『可愛そうぢやありませんか、これで食つて居るのですから……』

『……御役所の高等官杯は一度試驗が通ると、二十年も三十年も効力があるんですから豪氣でさあね』

『夫れあ君、コレラやチブスの注射は一年位しか効力がないが、種痘となると二十年も三十年も有効な樣なものさハ、、、』

咸北のさる町に十五年の星霜を送つたS醫學士は此頃あり合せの連中の如く獨逸あたりに博士論文の種子を買入れに行く樣な左樣な氣の利いた御人體ではない。

紋付の羽織に白い足袋、表付きの下駄で患家を訪問し、歸れば其儘端座してゐる煙で小さなチョコの緣を嘗める――斯くして約三ガロンのアルコール性飲料は其咽喉より食道を通過して胃中に納まる

御託宣に曰く

『昔は醫は仁術と云はれて居りましたが當今は此の仁術が頗る不仁術になりましたな。

獸法嘿で何千圓の手術料をせしめ宿屋と結托して患者を苦しめるのが矢張り仁術の大家ですからね。

古への國手は書齋に水を入れた桶を備へて居つて謝禮が來れば包の儘拋り込んで置きましたよスルと年末に弟子や家人が長い棒を以て中を掻き廻はし包紙が破れて錢は悉く底に沈み紙のみ上に浮くのを待つて錢を浚らへ出し謝儀の甲乙輕重を平等にして初めて使用したと云ひますよ床しい話しぢやありませんか。

ドウも仁術と金錢とは緣が薄い樣ですな、御寛の通り貧乏して居りますが必ずしも仁術の證據にはなりませんわい。

藥價ですか、藥價は毎月一回請求書を配りますな、看護婦かやつてゐますよ。

催促をした例はありません。

其の譯ですか、ドウも何處は携ふ、誰某は拂はん杯云ふことが明瞭に判ると其處は矢張り凡夫でね、分け隔ての心が起りますから努めて知らないことを心懸けて居るのですよ。

つまり患者が多いとか尠いとか云ふことは私の收入には餘り影響がありませんから寧ろ患者の無いことを歡迎しますな、之を今日の言葉で云へは市民に病患なからしむるを期すですかねハ、、、、。

夫れでやつて行けるかと云ふのですか、やつて行けませんね。併し皆んなで食はして丈は呉れますよ。愈々やれなくなると町の人が出し合せて都合して呉れますな。

他の開業醫への影響ですか。誠に氣の毒……私の收支を超越して居る爲に維持困難に陷らしてゐますな、誠に濟みません要するに此町に老ひ此町に死すべく運命付られたんですかね。どうです冷たくなつたがモウ一杯

◇母堂の禮狀

吉田莊一

河西君のお母さんから、禮狀が來る▲その全文は、本號にかゝげて置いたが、その筆蹟が河西君そつくりなのは、同人を驚かした▲甲の手から乙へ、乙から丙へ、皆の顧に追憶の情が今更のやうに刻まれる。

〔M〕

曹人愚語

伊藤憲郎

×

人間と云ふものの一生を考へると、ほんとうに運命であると思ふ。そう考へてゐるものゝ、運命、々々と諦らめて居るべくあまりに凡べての人々は弱くない。

運命との奮闘――これが人間に殘された場面であらう。

×

歸するところは一つである、泣き笑ひ叫び、何れもそれは挽歌に外ならぬ、然しながら、或る想起、或る思惟、全身を打する一の力を何人も否定し得ぬ。

×

美はしい天地、莊んなる建築、豐麗なる肉身、妙なる樂聲、われ〳〵は其處に複雜多岐なる欲望のときめきを如何にしやう

×

私は法廷から曖昧を持つてあらゆる人々の『運命との奮闘』を觀じたいと常々をひ願ふものである。

力量と分量と時量とから尠なからざる仕事の受難を感じる、厭になる、人を裁く、泌々僭越であると思ふ、然し轉職すべく頭が硬くなり了へた、嚙り付かねばなるまい。

×

私の今の心持は、大道に易を見る賣卜者のそれのやうに、人々の運命に對する雄々しき奮闘を、擴大鏡から覗かんとするのであらう。

老若男女、富貴貧賤――それ〴〵の法律的乃至犯罪的所業、それを一途に憎しみ怒り難じ去ることは人間と云ふものの一生に少しも同情のない結果と思ふ。

×

遮莫現代の人はあまりに金錢價値を謳歌して物の原價値を忘れてゐる、曹人は又甚しく法律の觀念に心醉して本來の判斷を飛び超えんとする、何れも共に危いことである(十四、十、三)

俗人俗語

〔六〕

吉田莊一

◎覆審法院判事の職を拋つて、今度若草町に、辯護士を開業した山口均四郎君『今までは、月給といふもので、適確に生活を保證されてゐたが、之からは俄に自給自立の計を立てねばならぬ。さう思ふと、何んだか氣がセカ〳〵して何事も手につかぬやうに思ふ。イヤ民間に立つて、自分で、自分を養つて行くといふことは、仲々氣樂なものでない』と、その通り、民間人は、スベテぼんやりしては居らぬのである。析角、山口君の奮闘を禱る。

◎帝國興信所の戸村君が早世したのは、まことに氣の毒である。圓滿で、誠實で、まことによく働いたものである。戸村君も、この二三年やつと氣樂なからだとなり『僕も一つ紳士のお仲間入りするカナ』といつて、諧曲の一つ二つを、稽古し始めたのである。樂な身分となると、スグ死の神にねたまれる。人生また多難なる哉だ。

◎この間、政友會の代議士兒玉右二君來る。尾崎さんが、理事として現に京城に駐在すと聞いて『支店長の二宮宗の上に、わが友尾崎君が理事として、一所に居るなざア、面白いなア、愉快な配合だなア』と頻に悦に入つて笑ふ。兒玉氏は、東都有名の粹人である

◎時々宴席や、公會席上、韓相龍氏の演說を聽く。結びには、きまつて『私は、朝鮮人であります日本語は習熟しませんから……』云々の一語を附加す。一寸、拳固で、胸を一擊せらるゝ樣な氣がする。韓頭取、お手柔らかに……。

新聞閑話

妙香山人

◎

朝新社長の牧山君、何といつても、こゝでは一箇の人物である。無論、いゝ所も、わるい所もあるだらうが、その腹を立てないことだけは、實際感心する

◎

先年物故した理事の酒井君、おそろしい口のわるい男で、そこに牧山君を置いて、散々な痛罵――人身攻撃を浴せたものである。それも毎日のやうに――すると牧山君、どんな顔してるかといふと、例の牧山一流のうす笑ひを浮べ、へ〳〵と一向氣にとめる風はない。全く攻撃に對する先生の無關心――横著には恐れ入つてしまふ。

◎

牧山君も、いよ〳〵政治家の資格が出來たといふワケか。

◎

精勤で、社員を恐れ入らして居る京日副社長の宮部さん、五分か十分のヒマがあると、スグ居眠りといふ一流の道樂を始める。今では副社長の居眠りといへば、京日では名物の一つとなつて居る。

◎

處で、宮部さんの居眠りたるや、決してコクリ〳〵の女性的なものでなく、急行列車式、若しくは颱風?とでもいふべき痛烈なもので、そのゴーッ、ゴーッといふ痛音は、あの三層洋風館を震撼させるから痛快である

◎

しかも、わが居眠り道の大家宮部さんは、不意を喰つても、決して驚きあわて、寢ぼけ眼で四邊を見廻はすやうな、ソンナへまはやらない。誰れがいつ訪問しても、豫めそのことあるを知つてゐたやうに、瞬間、莞爾として『おゝ、ようこそ、さア〳〵』落つき拂つて、そこの椅子をさすのである。蓋し居眠り道の、大乘に入つたものといはうか。

◎

一時は、飛ぶ鳥を落した山副讀賣氏である。それがドウしたわけか、今年の正月からたゞの一度も、倭城臺の記者室へ顔を出さぬとは。名物が一つ減るぢやないか。わかい人でズイ分世話をうけた人もある。誰か起つて、拳牛擁護團でもつくらぬか

◎

井上大朝氏は、近代人である書くものもさうだが、日常生活もさうだ。ふだんはほんとうに眞ッ黒になつて働いて居るが、日曜は一切公事を斥け、きまつて夫人令孃令息たちと、植物園奬恵壇などの秋を訪うて居る。新聞記者で、これほど家庭生活に、嚴肅な注意を拂つて居る人は、一寸めづらしい。

◎

地方別からいふと、木浦出身の記者が、京城では一等成績がいゝさうだ。日日の別府君も曾て木浦から來た、京日西村君がさうだ。この間死んだ河西君もさうだ。いづれも異彩を放つて居る。光州は、木浦の隣りだがあすこから出たのでは、尾島君（大毎）がいゝ。例の安田某もあすこだが、これは自慢にならぬ。

◎

前京日編輯局長長野直彦君、鄕里から亦戻つて來る。京城には古い男である。古い男は、つとめて抱擁してやりたいと思ふ

◎

長野君といへば、雜誌『朝鮮及朝鮮人』が、氏の經營に移るといふ評がある。結構!、結構!、大にやつて貰いたいものだ

◈如水會の記

平田久雄

京城には、東京商大の出身者がざつと五十二名居る▲それらの人々は、如水會といふのを設立し、時々相會して、親睦をあたゝめることにして居る▲一寸名簿を覗いて見ると、一番古い處は、星製藥の馬詰君、これが明治三十一年の卒業▲次が京城高商の鈴木校長、これがその翌年の卒業▲京電武者さんは、三十八年、その三十八年組には、朝鮮鐵道の伊藤さん、スタンダードの三好さんなどの顔が見へる▲古河の水谷さんとなると、ずつとわかく、大正三年の卒業▲その前年に、京日の笠神君（經濟部長）が卒業して居る。

京城雜筆

無題

一番ヶ瀬慶次郎

記者足下

度々御來訪を忝ふして恐縮です貴誌を愛讀する事に於て人後に落ちない私も『是非一頁……』と强要されますと、お歴々の名文章の間に割り込む事が一種の不安と焦慮を感じさせます、貴顯紳士列坐の眞只中に突き出された白面粗服の羞恥、冷汗だく〳〵思はず躊躇はざるを得ません、が『日常の感想でも……』とあの熱心と忠實なるあなたの態度は私を痛く感激せしめ且つ慚愧に耐えざらしめたるものがあります。

『日常の感想!』成る程、人間として誰しも有る筈である、否!無ければ成らぬものである、處が私は今日まで此の尊い自分のものである『日常の感想』なるものを餘りに粗忽に取り扱つて居た、無頓著に放棄かして居た事に始めて氣付いたのです、即ち職業以外極めて不鮮明なる生活、人間味に乏しい生活を繰り返して恬然として恥ぢなかつた事に感付いたのです例えば自然界の現象に對しても日常の人事に關しても其の感想なるものがフイルムの回轉につれて映出される場面が瞬間的に現滅する如く、又子供が無心に繰り展げ行く繪本の頁に視入る程度に過ぎず其れを取り纏めて深く印象に止めて完全に自己の物とする事を忘つて居たのです。

『どうだい近頃は』

『相變らず平凡さ』

簡單なる會話で眞實人生を片付け樣として居る、其間に刻々として人の生命は不斷の變化を續け秒時も靜止しない、そして進化と退化の二つの道を劃然と歩みつゝある生活の平凡化は肉體的にも精神的にも退化を意味する。

事々物々に對して周到なる觀察と嚴正なる批判を下し、些細なる變化からも偉大なる眞理の一端を攫み出して行き度いと努力するには『相變らず』ではいけない、平凡に濟して居ては捕え得んとする機會を逃す怖れがある。日常の感想を纏めて自から省み又は他の叱正に供へ、其れを向上せしむる努力はやがて生活の進化である。

そこでどうしても人は毎日感想文を綴ると云ふことが極めて必要であり、有意義に成つて來る、さうすれば其れは自個の爲めばかりで無く、雜筆記者諸君の御期待にも添ふ事に成り苦んで戸別訪問をなさらなくとも京城三十萬市民から毎日感想文が編輯室に殺到する事と思ひます、呵々

金玉の篇、瓦礫の章、混淆する所に自づから油然として興趣湧き社會相の大繪卷物を展げる快味があると思ひます、獸句を列ねたからとて決して輕侮視しないで下さい、其の裡から片言隻語でも光つた個所は見出し得られます、敢て富者、高官の言葉のみが金玉の響を發するとは限らない、里民漁夫の言は寧ろ眩惑的都會人の巧言に優るものと思ひます。

但し京城雜筆の紙價を低落せしむると御考えになればそれは取捨御勝手ですが。

斯くして雜筆誌上未知の人、或は日常近づけない人々、それは決して地位や名譽ばかり指しません時間的關係、境遇の相違にも因りますが、かゝる人々の御高話を容易に然も隨所に聞き得る利益があり、既知の人は尙一層親交を深ふする譯で一大倶樂部の觀を呈します、餘り冗長に成りましたが約言すれば凡ゆる階級の人には感想を書く事が必要であり雜筆は手料理持ち寄りの一大親睦會である樣に成りたいとの此れは私の希望に過ぎませんが……。今度は是位でお茶を濁して御用捨を蒙つておきます、今後は瓦礫の文をドシ〳〵投げ著けて記者諸君をお困らせするかも知れません。御要心々々。

◈無駄ばなし

吉田莊一

本町にもう二十年以上も住んで居るといふMさん曰く『私はマダ平田の主人といふ人に、會つたことがありません、獨り私のみならず本町連中で、あの人の顔を知つてるといふ人は、恐らくタントありますまい』と、これほどの閉居主義の人が、今年七十二にもなつて遠く世界の國々を見て來るといふは、何たる出來事だ▲Mさん亦曰く『但しあの人が名前を智惠人と呼ぶことと十五六の半玉が、たまらなく好きだといふことだけは、ほのかに伺つてゐます』と。

本町閑話

白玉山人

◎

大阪屋號の主人を、内藤定一郎君といふ、マダわかい人だがよくわかつて居るので、町内の評判は頗るいゝ。

◎

内藤さんの樂みは、書畫をあつめることである。そして同好と茶でも飲んで『時にこれはいかゞです』と、批評を仕合ふことである。が、内藤さんこの方は、マダ中學初年級ぐらゐ、よくつかまされては『あッ、また一杯喰ひましたかナ』と、苦笑して居る。

◎

内藤さんの書畫論に曰く『本屋といふものは、ほんとに利潤の少いもので、然の皮の突つ張つた人には、迚も馬鹿〳〵しくて出來るものぢやありません』

◎

丸一呉服店の主人――一口にいへば、耳を澄して、いつも良心の聲を聽いてるといふ人。疚しいことは、何一つ出來ない人先づ本町では、最も尊い人でせう、無論、佛敎の信者ですが『人間は、正しくさへやつて居れば天必ずそれに祿を與へる：：』これがあの人の人生觀らしく、いつもおつとりと、佛像のやうに、靜まり返つて居ます。

◎

本町で、古いのは、木島時計店、先代を平兵衞氏といひ。店を開いてから三十年以上。それと曖簾を競ぶのは、田中時計店先代を始一郎氏といひ。これは仲々えらい人でした。村木は近ごろ好評嘖々ですが、店はわかい、但し支配人の齋藤といふ人は、ヤリ手ですな。第一愛嬌があつて、品物をよく詮議して賣つて居ます。

◎

古いといふついでに、數へて見ると、木島、田中についで、硝子商の三田政次郎君、森啓君增田三穗君、それから古城さんの一門、いづれも三十年組といつていゝでせう。

◎

町田新聞舗の一店員から、本町ビルの經營者にまで、發展した篠崎さんは、何といつてもえらい男です。前號の本町閑話に細君の威光が、えらい耀いて居るとありましたが、マサカ細君の煙管の先に、うん〳〵押へつけられる篠崎さんでもありますまい。尤も、後妻で、わかくでしかもさとは、大邊いゝとは聞いて居ますか。

◎

何しろ近年本町から出た人物では、釘本さんが第一です。學問とか、識見とかは別として、人間としてアレほど出來た人は今後も一寸ありますまい。氏の一生のうち、再起が出來るものか、どうか知りませんが、ムスコさんが確に有望なことは、せめてものことだと思ひます。元來凡でない上に、あれほどの難局をうけ繼ぎ、日夕研きをかけるんですから、これは相當の人物になること請合。

本町ある記

對巒學人

◆

京城の秋は本町から來る、南山も北岳も夏その儘の姿で、靜かに空に聳えて居るのに、本町にはいつともなく秋が訪れて居る。

◆

呉服屋の陳列窓に布團地が並べられる頃から、道側の草花賣りの花の色が少しづゝ變つて來る。やがて文房具屋に障子紙が陳列され、氷屋が型の如く平蕗やき栗になる。店先きに煉瓦で釜を築いて居る頃には、誰れでも、もう秋だと感ずる。

◆

鉢植の朝顏の花が日毎に小さくなり、黃葉が目立ちて殖へる頃には、本町の夜を通る女の半分はセルを著て居る。

◆

果物屋にリンゴと梨の外に、柿が現はれ、夥しい松茸が野菜屋の店頭を飾り、香り高い初荳など賣り歩く鮮人の姿に、一日〳〵と秋は深み行く。桐の濶葉の地に落つるも、蓋し近い日であらう。

て居たのです。

い、其の裡から片言雙語でも光つ

ほのかに伺つてゐます』と。

東京の芝居見物

篠田治策

私は芝居が好きだ、夫れ故に朝鮮では芝居を見ぬ、朝鮮には觀るべき芝居が無いからである私が東京に行く毎に、私の芝居好きたるを知る親戚や友達は、必ず芝居に案内して呉れる。今回の上京にも、一親戚は到著の翌日直ちに市村座に案内して呉れた。

◆

私が學校を卒業して、初めて家庭を造つたのは、下谷の御徒町で市村座の近くであつた。或る時東京見物の爲め、鄕里より祖父が來た。祖父は家に到著すると、ふいと外出して行衛不明になつた。私の學生時代に一度上京したことはあるが、祖父は東京の地理には全く不案内だ。買ひ物に出て、迷ひ兒になつたであろうか、迷ひ爺なれば其内に歸宅するであろうと思つたが何時まで待つても歸らない。田舍出の祖父が、何處かで困つて居ると思ふと、心配に堪へない手を分ちて心當りを探したが、皆目判らない。警察に迷ひ爺の捜索願を出すなどは、不見識の話だなどと、種々心配して居る際、夜十時過ぎに、ひよつこりと歸つて來た。聞いて見ると、早速市村座を見物して來たとのことであつた。市村座は私にはこんな因緣のあるところである

◆

私の父も一層芝居好きであつた。斯る芝居好きの子孫が、芝居が好きなことは、別に公の秩序を亂り、善良なる風俗に反することであるまい。學生時代には燒芋のコンパニーにも苦む程の貧書生で、到底芝居など見る餘裕はなかつたが、卒業後、一本立ちとなつてからは、替り目には大抵の芝居を見物した。朝鮮に來てから、衣食住には餘り不足を感じないが藝術趣味の缺乏は、大なる苦痛である。故に一二ヶ年に一回位東京に出る私は、人一倍の樂みを以て芝居を見物する。

◆

市村座の藝題は『ひら假名盛衰記』と『吉樣參由緣音信』であつた。前者は吉右衛門の樋口次郎兼光と、後者は菊五郎の湯灌場買吉三と、吉右衛門の齋坊主辨秀が呼び物である。吉右衛門を見たのは久振である。辨秀は輕妙であつたが、樋口は源平時代の豪勇、木曾義仲の四天王の一人としては、少しく芝居を見て居る感があつた。菊五郎の吉三は、乃父の面影を忍ばしむる點は多々あるも、吉三としては、少しく上品過ぎる樣にも思はれた。然し落付いた藝を見せて居るのは確かに益々巧妙の域に進み、乃父の名を辱かしめざるものがある。

◆

超へて數日、『日本一』の學者と註された、從兄弟の鈴木博士夫妻は、私を歌舞伎座に案内して呉れた。新築後の歌舞伎座は、東京第一の堂々たる劇場であり、出し物は、一番目『近江源氏先陣館』と『來山』中幕に『淀君』、二番目に『辨天娘女男白浪』であつた。羽左衛門の盛綱、中車の和田兵衛は實に堂々たるものであり、歌右衛門の盛綱母、仁左衛門の時政、松蔦の篝火、龜藏の早瀨は、巧妙であつた。中幕仁左衛門の來山は此優の嵌り役、福助の藝妓小藤は殊に目立ちて美しく、遊治郎をして、心ときめきせしむるに充分であつた。『淀君』は由來歌右衛門の得意のもの、技巧に於て批評すべき限りでないが、寄る年波に、動もすれば、安濃津城中の茶々時代が『桐一葉』の淀君になりそうであつた。二番目では羽左衛門の辨天小僧と左團次の南鄕力丸が秀逸であつた。私は明治三十五年に先代菊五郎の辨天小僧を見た　其後幾年かの後に、羽左衛門のそれを見た時には相距ること遠しと思つたことがあるが、今回又た之を見て大に意を安んじた。要す

るに今回の歌舞伎座は名優揃ひで、好劇家の見遺がすべからざるものである。

◆

帝劇が數日前に始つた、妻君の手前漾來の珍客をダシに使かつて、新橋邊りにて宴會などを催さんとする友人等も多かつたが、私は何を措ても芝居を見ねばならぬ。帝劇の狂言は、一番目『日蓮上人』、中幕『おなつ狂亂』二番目『小梅と由兵衞』大切り『廿四孝狐火』であつた幸四郎の日蓮と由兵衞、梅幸のおなつ、宗十郎の八重垣姫、松助の坊主は上出來である。殊に龍の口と狐火の舞臺は、電光を應用して、大仕掛の背景を見せ田舎者を驚かすに充分であつた

◆

私は十日餘りの滯京期間に、此丈けの芝居を見た。劇評家の向ふを張つて、一々批評を試みたらば、『雜筆』の原稿難を免るるかも知れぬが、今は其暇も無く、又其專門家でも無い。要するに、各俳優の技藝は、相當に進歩したに相違ないが、明治時代の團、菊、左を觀た眼には何か物足らぬ點もあるようにも考へらるる。然し之れは、先入主となり、昔は今に優り、俺の若い時分といふ如き、世に有り勝ちの僻見かも知れぬ。昔の力士谷風は强かつたが、常陸山、太刀山との優劣を判斷すること能はざると同樣である。私は大正時代の藝術にたづさわる今の名優に敬意を表し、東京に出る毎に、芝居に案内して呉れる、親戚と友達とに、感謝するのみである。私は今、燒芋のコンバ時代と異り、我祖父の如くに東京に到著するや否や、直ちに劇場に飛び込み、或は私から誘引

東京雜筆

堀一知郎

目眩るしいばかりなのは、實に東京の生活である。朝の出勤が先づ八時の、退社が六時として、不愉快なる電車の往復時間二時間を算入すると、勞働時間は實に十二時間に及ぶのである

◇

されば是に睡眠の時間八時間を加へると、一日中私の時間として殘されるものは、僅に四時間であるが、然も此の時間中に入浴や食事、さては讀書などをせねばならぬので、休日以外、身體の休まる時は先づない。

◇

夫れ程東京の生存競爭は激しいのである、ノラリクラリして居ては活きて行けないのである處が此の半面に驚く許り華やかな世界がある、其一例として一人當り十二圓の觀劇料を徵する歌舞伎座が、連日滿員の盛況を續て居ると云ふ一事を擧げ得る

◇

單り歌舞伎座ばかりでは無い邦樂、市村、本郷、帝劇、松竹等の大劇場は、例外なく滿員である。然るに偏在して居る場末の劇場は、何れも不入が喞たれしても、行けぬことはないが、旅先きで優遇せらるるは、亦何よりも愉快なるものであるから東京の芝居見物は、私にはダブルプレーである。

て居る。是は抑々何を語つて居るか、即ち東京の昏富の懸隔は震災以來極度に大きくなつて居ることを有力に示して居るに外ならぬ。

◇

昏富の大離背！、何と云ふ悲しむべき現象であらう、思想の惡化も此處から生れるし、道義心の弛緩も是に根源を發するだらう。と云つて、既に開き切つた此昏富の懸隔を、今更奈何することも出來ぬ、要は是を露骨にせぬ處に政道の妙用があるのだが……。

◇

今の東京には、ゆとりが無く潤ひ味が無い——隣人愛は霧散して、直接々渉我れ勝ちとなり自力を唯一の武器と賴む時代となつて仕舞つたらしい。ア、果して何日の世になつたら、恬淡な昔の東京に還るだらうか。

◇歩きながら

吉田莊一

鈴木商店の澤村さん、いつ見ても、體格のいゝのと、若々しいのは、羨ましくてならない▲尤も實際お年も若いんだが…『これでズイ分頭は使つてゐるッモリなんですが』

京城南山の梵鐘

松嶋惇

○

京城南山大谷派本願寺京城別院に貴重な新羅時代の鐘がある、此の鐘は高さ五尺一寸、口徑二尺九寸四分、口緣厚さ六寸一分で銘文がないのである、此の外朝鮮内に在る新羅時代の梵鐘は二箇存在する、一は江原道平昌郡五臺山上院寺の鐘にて、高さ五尺五寸、口徑三尺で、其鐘頭に開元十三年（新羅聖德王二十四年、今を距ること千二百一年）乙丑三月八日鐘成云々の銘文を陰刻しあるもの、二は慶尙北道慶州古蹟保存會内に保存し在る奉德寺鐘にて、高さ十一尺口徑七寸五分、口緣の厚さ七寸あり、其の鐘に陽刻せる銘文の末に大曆六年（新羅惠恭王六年今を距る事千百五十五年）歲次辛亥十二月十四日鑄鐘とあるもの等である

○

此の三梵鐘の内、五臺山上院寺鐘と慶州奉德寺鐘とは、銘文に依りて當然新羅時代のものだと謂ふことが明かであるが、京城本願寺鐘は銘文がないから、夢ひ人々の鑑識に依つて、其時代の推定を異にするのであるが、私は新羅時代だと鑑定します、夫は此鐘の口帶の唐草模樣は、慶州にて發掘せらるる新羅瓦の紋樣と同一であるばかりでなく、其手法も亦同一なること、又陽刻せる天人の構圖は唐式にして、殊に纓絡の飛動せる其手法は五臺山上院寺鐘に陽刻しある天人の纓絡と一致し、且つ鐘の形式より之を觀るも、新羅統一時代の絢爛たる藝術を談る者である

○

私が大正三年の春、此の鐘の手拓を爲したる際、其の鐘閣に關野博士の鑑定書が板に記載して掲げられてある（今は何れにか紛失してありません）其の鑑定は明治四十二年十一月二十四日調としてある、本文に『年代、其樣式及模樣より判ずれば約八百年前のものならん。樣式、樣式と支那式とを折衷したる者にして、此點に於て從來未だ曾て見ざる珍奇の鐘なり』云々とあり、此の鐘が約八百年前のものとすれば、丁度高麗國初より約二百年後である、即ち關野博士は高麗時代のものであると斷ぜられたのである、私は關野博士が高麗時代であると鑑定せられた其の形式や模樣の詳細なる學說を我々後學者の參考の爲めに發表せられんことを望むのである、總督府でも關野博士の說に隨ひ、之を高麗時代の鐘として朝鮮古蹟圖譜第七卷に掲載してある、私は此鐘の時代に關しては猶ほ充分研究の餘地があると思ふ、當時本願寺の住職に就て此の梵鐘の由來を尋ねてみた處、此の梵鐘はもと京畿道砥平郡龍門山上院寺に在りたるもので、今を去ること凡そ千年の昔、

【二】

新羅敬順王の命に依り鑄造したるものの由にて、明治四十年四月之を讓り受けたりと云ふ、龍門山上院寺の所在を東國輿地勝覽等の書物で調べて見たが、砥平郡には上元寺又は龍門寺はあるが、龍門山上院寺なる寺院はないのである、或は五臺山上院寺と其の寺名が同一であるから同寺より買受けたるものにあらずやと思はる。

○

私は此の本願寺の梵鐘の鑄造年代の鑑識論は兎に角として、當時の文化を談る此の梵鐘は非常に大切なる參考品であるに係はらず、何故に國家が之を保存しないのであらふか、慶州奉德寺鐘は既に慶州保存會にて保存の方法を研究されてあるから、之は問題にする必要はないが、京城本願寺鐘は寺院が日夕之を撞き日々破壞に導きつゝあるのである、而も本願寺鐘は總督府の直下であり、是等の保存を專門的に研究せらるゝ方々が朝夕其の傍を通行せられ、且つ朝夕此の破壞に導きつゝある鐘聲を聞きつゝ誰か之が保存に關し研究されたと云ふことを聞かないのである、眞に考古學上遺憾に堪へないのである、此の本願寺鐘と上院寺鐘とは、國家が一日も速に國寶として保存せられたいものである、內地に於ては此等の鐘よりも優秀ならざる平凡な鐘に至る迄、國寶として保存を指定せられて居る、私は獨り梵鐘と云はず考古學上參考となるべきものは、朝鮮に多數あるのであるから、之等の朝鮮研究の爲めに大切なそうして貴重な寶物に對しては、內地と同樣に其保存の方法を研究せられんことを希望して止まないのである。

式にして、殊に纏絡の飛動せる其　で、今を去ること凡そ千年の昔、　信仰の大地を破壊せられんことを希望して止まないのである。

歌の話

市山盛雄

古事記や日本書記に現はれてゐる歌は、殆んど技巧と云ふものが目立たない、天籟のこゑそのままの感じがする。

例へば媛女等が行くのをみて詠める歌に

倭の　高佐士野を　七行く
媛女等　誰をし覓かむ

自分の好むものが先頭に立てるを知りて

且々も　最前立てる　可愛をし覧かむ

然し、この純情、宛も口をついて出づる言葉そのものの如き歌は、萬葉に至りても、尚ほ消失されてはゐなかつた。眞情は、技巧を超越してゐたのである。然し萬葉時代に至り初めて、技巧の冴えた作品が世の奇を衒ふ人達にさわがれ出し、人に、優越心、名譽心等を嗾り出したものとみられる。であるから人間が不純化してゆく代りに利巧な作者が追々と頭角を現はして來たものらしい。このへんのことは、宣長の石上私淑言によく物語つてあるから參考に書いてみよう。『萬葉には、人丸、赤人を歌の達人として山柿と處々にいへり。是れよしあしを云ふ故に上手下手の分ち出でき好く詠まむとする事になれり。此れよりして次第にその好く詠まむとする方は長し、眞の情は次第に消する樣になりゆく也。是自然の勢なり。萬葉集の頃に至りては、早や、眞の情を詠むと巧みを本とすることと、大方半になれるなり。さて其巧みに好く詠まむとすることを次第に長ずる故に、遂には歌道と云つて一つの道に成れるなり』これは丁度原始時代の素朴な生活から人智の發達につれて、今日に至つた經路と變りはない。現下の物質文明の絶頂から再び、形式生活を離れて自然に還らむとする傾向は、眞個な人間生活を欲するつまり大童心を欲求する本質的な心の叫びであるとでもいへようか。私達が、紀記萬葉の歌集をむさぶり讀むも、畢竟、形を離れた純朴な姿に觸れて、感情を淨化し、藝術をみがきたいと思ふはかない念願にすぎない。現代のゆき詰つた歌壇は、形式美にとらはれ過ぎて心の問題をお留守にしてゐるのではなからうか。要するに短歌も人間の完成が根本であつて、未完成な人間に眞に後世の光りとなる程の作品は望まれないことである。

單に美しい歌を詠む人ならば數多いであらう。殊に、現今の如き悧巧な人の多い時代に於ては、その判別に迷はされる。然し、生命のある短歌は自己の全部であると、信ずる程の作品を詠むことにせなければ、それは德川末期の御道樂に過ぎなくなる。嘗て私の處へある實業家相當な紳士が來て歌を敎へて呉れと云つて來たことがあつた。私は恐縮して仕舞つた。歌を眞劍には詠む心算であるが、まだこの道を辿り出して四五年にしかならないし、いまのところ大きな顔をして、歌の講釋をする勇氣も出ないので『歌がお好ですか』と尋ねてみた。すると宴會で、無愛想だし、時々獸句るに都合がいいからつまり宴會の隱藝にすると云ふのだ。呆然として私はかへす言葉が出なかつた

私達は歌に就いて何を說く必要があらう。何を人に知らする必要があらう。自らここに至る人達なれば寂しい道連れとなるに違ひない。私達は虛僞や欺瞞の多い人間生活をいささかでも淨化し、崇高な道に自分を見出そうと思ふ。然しその道行ははてしない雲間を彷徨ふ如き空虛な寂しさを體驗するばかりであるのに、私達は何を好んで歌の研究を始めたであらう。靜かに合掌して自然に融合せんとするはかない佛陀の臍みを思はしめるのみである。

◈油繪ならば

石川利夫

東拓の山崎技師、前々號に『東拓三尊』の漫畫を書き、本誌讀者をアッといはせたが、この間も氏を會社に訪ふと『原稿をといはれると、一寸困る……但し油繪ならいつでも』聞けば、氏は洋畫が大好きで、一流の師につき四五年もみつちり修業した人だといふ。

思ひ出

松田學鷗

も哀れにて、身に泌みわたる寒さ寥に眠るを得ず夜を明かしたのであつた。喇嘛僧と身を變じ、藥竈りつゝ彼の奥深く旅したる我れ今尙ほ身の健かなるが不思議である。

◎斯く書きつゞくれば限りもないが、舊い事ゆへやめるとしよう只舊い序でに書き加へるが、雜筆八月號であつたと思ふ、誰れかゞ山縣悌三郎先生の、少年園や文庫といふ雜誌を出されたのを月刊雜誌の濫觴であると言つて居られたがあの少年園は明治二十一年の天長節に初號を刊行されたもので、雜誌としては濫觴などゝ言ふべきものでは無い、然し今より顧れば舊い時代には相違ない、なぜ予が斯くも刊行時代を記臆して居るかといふに、予が亡兄大竹多氣といへるが山縣氏兄弟の美擧を賛して毎號必ず寄稿した故である、兄は當時大學を卒業して間もないことで後ち工學博士となり、千住製紙所長、米澤、桐生兩高等工業學校長となつて物故した。予も文庫の寄稿者であつた、指を屈すれば最年三十八年となる。

◎今月二日は、古暦八月十五夜で、三十日は九月十三夜に當る。同じ月の間に二度の月見をするといふのも面白い。春は花、秋は月は世間の通語であるが、若き時代は花もよかつた、然し年老いては月に對する情が多くなる。

◎大袈裟の如くだが、予が足跡は殆ど海内に遍ねしと言つてよい月の名所の須磨、明石や、石山和歌浦を始めとして天橋立や嚴島でも中秋を賞した。それから内地を離れては、臺灣、滿洲、朝鮮、蒙古、南清と處々に中秋の月を愛でた、これ等の昔を回憶すれば萬感交々胸中に湧かざるを得ない。

◎明治三十六年の中秋、しかも夜の三更、予は下總なる犬吠岬の突ッ鼻に立つて、金波銀波寄せ來る百尺の崖上に、太平洋を照す月を見た。生れて以來幾たびとなく會つた中秋で、第一の壯觀たりしを今も記臆する、それについても言ふのであるが大和男兒は誰れしも日出づる國に生れしを誇つて居る、然し月出づる國としては誇る者を聞かない。予は月出づる國としても亦た誇りたいと思ふ、支那は廣い、けれども月の海より出づるを見ることは容易でない。支那には古來詩人が多い、然し日の出を詠んだ傑作は殆んど無い、支那は落日の國であり、落月の國である、年々歳々國運の衰頽するも亦た故あるかなだ。

◎同じく三十九年、朝鮮咸北の茂山に居つた。前夜より降りたる雪は其の日の晝頃に漸く霽れ、夜に至つて一點の雲もなく、明晃々たる月は尺餘の積雪に映じて、一段の寒光さながら玻璃界中の人たる心地した。中秋に雪、國境の苦を嘗めて始めて知らるる事で、況してや守備隊の外、内地人の居らざりし當時の回憶とともに此の光景は忘れ得ないのである。

◎四十二年、蒙古ウヅムチン王府を距る東十里、牛羊の外、人影稀れなる茫々たる原上に露宿して凄凉限りなき中秋の月を眺めた、只耳に入るものは遙かあなたに胡弓に合はする土人の謠、亡國の調

京城雜筆

◈頰杖ついて

石川利夫

◎京電社長の大橋氏が入京し、亦金剛山電氣の久米氏が入京するどつちも朝鮮ホテルに、お御輿を据えて居る。いづれ然るべき相談が、出來あがるのだらう。

◎大橋氏は、有名なブッキラ棒だ、とんと愛嬌のない男だ。しかし遊藝の嗜はふかく、何でも長唄？は東京でも有名なものださうな人は、見かけに依らないなどと、與太を飛ばすべからず。

◎久米氏は、將棋は、ゴ自慢である、何んでも二段位の免狀を有つて居る筈。無論、素人としては柳原保惠伯（三段）と共に、東都に横行闊歩して居るのである。

◎京城の紳士間で、雄を唱へて居るのは、高橋氏（章之助）である。その高橋氏が『久米さんは、強いッと、一目置いてる處を見るとお世辭でなく、相當やる事明白。

◎下岡政務總監の速に病床より起たんことを禱る。總監の一本槍も亦將棋である。どの位強いものか、どんな筋のさし口か僕之を拜見したことはないが、兎に角相當鋭いものらしい。

る、年々歳々國運の衰頽するも亦

◎久米氏は、將棋は、ご自慢で

見したことはないが　東に角相當

鋭いものらしい。

京城雜筆

雜想

木浦　福田有造

紹介と云ふ事

松本さん

世の中に紹介と云ふこと程アテにならないものはないと思ひます紹介狀を書くにしても亦多人數の前で紹介する時でも大抵は大袈裟で懸値があり勝の樣です、紹介される人は何となく顏もポーッと赤くもなり、樣ぐったい氣持です。

京城雜筆の十月號の私に對する御紹介も普通一般と云へばおしまひですが、餘りに世俗的なるに吃驚しました、もう少し何とか書いてもらひたい位で、實は泣きたい位です。社會的の地位とかブルジョー階級とかこんなくだらない區別はやめて一個の人間として、個性を尊重する人間として、享樂的氣分の横溢する人間とか、ありのまゝを現實の悲哀を感じない程度でやつていたゞきたいものです。紹介と云ふものはあんなものだと云へばおしまひですけれども、私の眞が承知しないのです。事更ら取消しを願ふまでもないことですが變妙な氣持の持主だと思つていたゞけばいゝのです。或る僕の友達が大厦高樓にゐるよりも裏店で世の見返らぬ女と暮した方がどの位いゝか分らないと云つて由緒ある家を飛び出した、痛快兒があります。僕も亦共鳴して快哉を絶叫しました、紹介と云ふ事はこんな氣でやり度いものですが、普通的にはそうゆくまいと思ひますが、現在は看板に懸値があつた方がよく通用します、世は轉々と浮薄に推移します、之も一つの世相です

河西君の遺稿

遺稿の出版と云ふことは中々にいゝ事である、故人を追想する意味に於て是非出版したいものだと思ひます。京城に同君が行つてより中々に筆硯は勇健に且つ老練になりつゝありました、實は私も何とかして見度いとは思つてゐた矢先に、雜筆で見て嬉しく思ひました、何とか成ろうぢやありませんか、今年の春死んだ久津見蕨村氏の遺稿出版に關する遺言は中々に面白いもので皮肉にも悲壯にも考へられます、誰だつて自己の書いたものゝ散逸を悲しく思ふのは同一です。

河西君の遺稿を繙めるなどゝ云へば何となく涙ぐまれます。

『舊稿を涙流して見るにつけ君の妻の老ひゆく姿』

もう筆も進みません。

松本さん何とかしようぢやありませんか。

詩學抄錄

古城梅溪

鯉魚

古詩に客從遠方來、遺我雙鯉魚、呼童烹鯉魚、中有尺素書（文選）

一剖黃河鯉（干鱗）双魚銜尺素（同）黃河双鯉隴青雲（同）來往双魚尺素勞（世貞）乍有双魚論故舊（同）尺素傳雲鯉（景明）魚信黃河北（汪道昆）莫從鴻鯉論浮沈（元美）只愁江上鯉浮沈（同）可怪天南鬱鯉魚（同）遠信初還双鯉去（杜牧）開魚得錦字（李白）竟無尺素傳朱鯉（宗臣）双鯉迢迢一紙書（商隱）湖中多鯉魚。故人時把釣。應有北來書（茂秦）手携双鯉魚（光義）

老蓬

楚國の老萊子小少より孝行を以て親を養ひ甘脆を極む年七十にして父母猶存す萊子荊闌の衣を服して嬰兒戲を親の前に爲し言老を稱せず親の爲め食を取り堂に上る足跌して而して偃す因て嬰兒の啼を爲す（孝子傳）

去著老萊衣（常建）彩衣仍出上方裁（元美）趨庭彩服生春色（同）目送老萊衣（宋璟）先奏稚子舞。更著老萊衣（李白）棠花含笑待班衣（錢起）安親更功老萊心（劉方平）到家知慶綵衣新（靈一）此去不須求綵服。紫衣全勝老萊衣（靈徹）

『旅の提燈』を讀む

工藤武城

『旅の提燈』とは、總督府醫院長志賀潔先生の、半歲歐米出張の旅日記を家土產として、眺縣の間に配られた、百三十頁計りの麤酒たる小冊子である。

學者流の、ごちゃくしした頭も尻つぽも無い手觸の荒い、生硬な文章で惱殺さるゝ事と覺悟して、內心尠からず恐怖の念を抱き乍ら、先づブランクページを捲る。

目次の標題が、『白毛布、赤毛布』『夏帽子を棄る』などゝ非常に碎けて居るので、稍々安心の胸を撫でおろす。

一頁二頁と讀んで行く。亞米利加スタンフォード大學の參觀記がある。

『解剖教室の如きは、其崩壞せる一部を、僅かに板圍を以て仕切り、板張の儘で教授をしてる桑港震災を受けて已に八星霜今尙は改修を見る能はざるは誠に同情に堪へぬ。私は耶蘇教徒等が、朝鮮などへ注込む金を、寧ろ自國のスタンフォード大學へ寄附して、西部米國の學生を滿足さしたいと考へた。』

自分も同大學の荒廢を實見した事があるので、誠に同感である。大金を使つて傳道の爲と稱して朝鮮に來り、鮮人少年を鷄姦するブライドルや、朝鮮少女を强姦するマルコンソン等の宣教師に大鐵槌を下すあたり、たゞの三文學者には到底言ひ得ない、痛快至極な文章に釣込まれ、橫座りは端座に變る

亞米利加の禁酒問題を提げては禁酒令を出した時の內閣諸公が、アルファアルファーなる飲會を組織した事や、屍體の棺桶と稱して酒類の密輸入の盛況や、家庭用輕便釀造器が、酒自體に非ずとの口實の下に白晝到る處に飛ぶが如くに賣られる現狀や、酒の快樂を奪はれたアメリカ人は、其代用として亞片煙草を使用するに至り、統計に上げられた亞片中毒者已に二十八萬人なるも、實數は其何十倍なるべしと、醫學的犀利なる觀察を試み。

米國の黑人虐待を見ては、

『耶蘇の博愛も、人種を超越し難いと見へる』

アメリカ宣教師の輩が、口をおし拭つて、教壇から何も知らぬ鮮人等に、凉しい顏をして、亞米利加を平等の天國の如く說けるを痛罵し、

『耶蘇教の守本尊たる十字架上の基督像は、一見吾人をして慄然たらしむ。基教の歷史は古今を通じて流血の歷史なるは故ありでは無いか。斯る慘忍なる宗教を取來つて、之を國教なりと稱し、此を以て一國を治めんと欲し、又此を世界無比の宗教なりと叫びつゝ、殖民地に向ひ、又東洋に臨む、果して是なるか

【一六】

『愛と云ふ物を喰わむとする餓鬼である。』

彼等の目潰しを喰つた米化日本人を戒めて、

『吾日本國民は其本來の美性を失はずに進みたい。輕躁なる亞米利加人を學んではならぬ。吾足は大地を踏むが如く重く、而して靜かなる足音でなければならぬ。』

『米人の如き理を非に曲げて橫紙破りの橫暴を働くものは、何時かは大罰が來るであらう。』

閻王の餓鬼に向ふが如く、或は秋官の犯罪者に對するが如く、秋霜烈日、假借なく春秋の筆法を用ひ或は又た一轉して、

『私は亞米利加人を見ると何時もアメーバを思ひ出す。彼は物好きにアチラへもコチラへも脚を出す。又引込める。其千變萬化が面白い。顯微鏡で見て居ると限りなく面白い。然かし彼は遂に一定の形態を爲さずして死んで仕舞ふ。』

遂にお里が現はれて、商賣道具の顯微鏡が飛出した。然かし此位面白い比喩は一寸思出さぬ。滿鐵を共同管理にせろと一寸手を出す、貴樣の出る幕じゃ無いと叩かれて引込む。樺太の軍事占領は怪しかぬと又脚を出す。いらぬおせつかいだと呶鳴られて直ぐに引込む。到頭アメーバーは細菌學者の載物硝子の上で、可愛相に核も成形質も滅茶〳〵に成つて往生して仕舞つた。嗚呼悲哉。

紐育では二弗七十仙を奮發して麥藁帽子を購ひ、意氣揚々としてホテルに歸り、ボーイから且那、正札がブラ下つて居りますと注意され、

『遊子泰然として泡を喰ふ』

京城雜筆

などの輕いヴィットもあり、無邪氣な一面が現はれて、謹嚴な先生の風貌を思ひ出して思はず失笑せしむる。

體操の本場のスヴエーデンに於ては。

『今日わが邦に流行する體育奬勵なるものは、果して國民一般の體育に適するや否やを疑ふ、競走や高飛は、車夫や曲藝師のする事で、ベースボールは全く職業的に成て居る。少數の所謂運動家を出したとて、國民一般の健强を期し得やうか。國際的競技とか、オリンピックと稱するものは、此職業的運動家の勝負で、國民の勝負では無い。常陸山が一人强いからとて、日本全體の强さを意味しない。眞の德生家、眞の愛國の士は、運動の性質を考へ其方法を選ばねばならぬ。米國や二三外國の尻馬に乘るのは馬鹿にされた狐の圖であらうぞ』『歐米の體育を奬勵するも、馬を愛するも、落ち行く先は賭事である。』

十月二十一日に市俄古野球團が入京するとて騒ぐ連中よ。赤面すると無くして此文章を卒讀し得るか時は秋である。吾人の祖先は燈火親しむべしとて、勉學修養に取つて一時千金の貴重なる時であることを敎へる。此時期にバットをぶら下げて亞米利加から朝鮮三界に迂路つく人間が、商買人でなくて何であるか。(以下次號)

江湖百話

漢水釣客

◎

朝鮮新聞社長牧山君の隱接に、マダ新しい一軸が掛つて居る、そして、それに國風二首が題してある。

福德はいづれにありと人問はゞ
うんと働く家と答へむ

碎けては又碎けては圓かなる月
こそ浮べ浪の上の月

筆者は、筌野といふ人である。ハテ筌野とは誰だつたか。

◎

これを牧山君に訊くと『君、うまいだらう、これは富田儀作翁だよ』ナ、ナーるほど。

◎

富田翁といへば、敬服する處がいくッもある。が、最も感心するのは、翁の知識慾の熾んなことである。殖產興業のことは勿論、普通の雜談に出る道歌一首でも、苟くもこれはと思ふと、得心の行くまで質問し、そして、それをしつかと記憶中に、たゝみ込む。するとモウ一生忘れないのである。

◎

こんな風で、翁は仲々の進步主義者——そして、驚くべき新思想家なのである。

◎

年齡的には、年をとるが、知識的には、翁は毎日若返つて居るのである。

◎

『何をたべれば、淺井さんはあんなに年とらぬのだらう』これは漢城銀行の淺井さんの話の出るたびに、人々の話頭にのぼる感歎詞である。實際、淺井さんは、この二十年來、少しも年とつたやうに見へぬ。不思議な存在である。

◎

これを淺井さんに訊くと、わかい時から臍下丹田に、力を入れる修業をした。まア、そんなことでせうといふ。別に、何もたべてる風はない。

◎

が、僕思ふに、淺井さんの不老法は、唯だ臍下丹田のみでなからう。あの人には、何處か深く天命に安んずるといふ氣風が見へる、心の奥の安靜が、淺井さんの箇體に、影をうつすのではないだらうか。まつたく淺井さんには、何處か自適悠々の風趣があふれて居る

◎

朝鮮毎日社の大島君は、新聞界での人氣男だが、時々愛嬌たつぷりの失敗をやる。この間も篠田君といふ社員を招聘した。そして、その晩篠田君が細君同伴で、挨拶に行くと、何をどう間違へたものか畫家の柴田（春嶂）とハキ違へ『これは先生、ようこそ』といふので、床脇に招ずる。篠田君イサヽカ狐につまされた思ひで、いふ通りになつて居ると。それからいろ〳〵のおとりもち、遂に盃を重ねて居るうちに、始めて社員篠田君とわかつて『あゝ君だつたのか……イヤー』杯をポタリ……。

◈卓上小閑錄

平田久雄

大毎支局長の大森氏はテキハキした人物である。曰く『私は元來、無宗教無信仰の男です、だから神や佛を拜むヒマがあつたら、女の顏でも拜み、お酒の德でも讃へたいと思ふんです』頗る徹底して居る▲ところが、この大森氏、あれで支社員などには、仲々厚いので新來ながら社内から大に頼母しがられて居るさうな。

皇道卽孝道

赤木萬二郎

我が皇道は、我等が神勅として崇敬の誠を集めて居る所の、皇祖太御神の『天壤無窮の大御宣言』と『此之鏡者。專當二我御魂一而。如レ拜二吾前一伊都岐奉。』との御聖訓を皇孫に授け賜ひたることに、其淵源を見出すのである。やがて此の皇道は、我が皇國の創設作用の理想となりて、いやつぎ〳〵に代々の天皇が、生ける父母に事へまつるが如く、上、御祖先なる皇祖皇宗に眞心を盡して孝子の心を捧げ賜ひ、大孝の誠を申べ賜ひ、子孫臣民に、父母の赤子に於ける眞情を以て、慈みの德を垂れ賜ひ其仁慈の皇德は、遍く宇宙天下に及び、至らざる所なく。又我等の祖先は、億兆一心となりて眞の人情の泉源たる、孝心に基ける赤誠を、生みの親に盡すが如く君國に捧げ奉り、君臣上下一心同體となりて、此現實世界に、皇道卽孝道の國體を成就し、實現し、かつ實現しつゝあるのである。

我が皇國にのみ特有の神社は、子孫臣民たるものが此皇道卽孝道に基ける眞心を、君國の祖神に捧げて、敬虔の念をこめたる至誠の交感をなす所の民衆的、開放的の皇室、國家、國民共有の神聖なる場所である。

我等の祖先は、此の神社を中心として、正直清明、一向に神明君父に崇敬の誠を捧げ、祖先の名絕タジ、徒には死なじ、と皇祖太神の神勅遺訓に則りて、『義ハ卽チ君臣ニシテ情ハ猶ホ父子ノコトク』の一大精神の下に、あらゆる民族、文化を包容、攝取して肇造創設の功を積み來りつゝありて、これを我が皇國の萬世一系の皇統に就て見るに、其の高天原系の中に、大陸系の女系の血統渾融せる著明なる物を擧ぐれば、皇祖大御神の直系嫡統にまします皇位、第一代の皇宗神武天皇の皇后は出雲系の事代主命の御子であり。又彼の應神天皇を生み賜ひし神功皇后の御母は新羅系の王統の出身なる天の日槍――田道間守の系統にあれまし。彼の京都に尊都し賜ひたる中興の祖、桓武天皇の御母高野皇太后の其の先は百濟系の王統の出身なる等にて、かくのごとく我が日本民族なる一大家族の宗家一系の血統の中に出雲系、新羅系百濟系の血液混入せることは、上古にありて夙に、當時東洋の海陸を通じて優越せる本質及びこれが文化を有せし民族が、我が尊嚴にして永遠性に富める日本民族に接觸、攝取せられて渾然一體となり更に其の偉大性を增大、雄傑ならしめ、以て理想的國家、世界的文化の肇造創設の作用を盛んならしめたる皇道の淵源を語る史實と見るを得べし。かくて明治天皇維新の興國の御大業は、遙かに皇祖太

御神、皇宗神武、應神、桓武の諸帝に對應して、祖宗の御理想たりし桑槿一家の大精神を我が半島に擴充實現すべく、これが復活の生命を與へられたるものと見るべく、爾來半島に居住する內鮮の同胞、及び此土に咲ける傳統的文化は勿論、山川草木に至るまで皆復活の光明に浴し、生氣潑剌、遍く一視同仁の御惠澤を被らざるものなきに至れり。

眞に一大家族として、孝心に燃え孝道に生きねばならぬ、我等七千萬同胞の夙夜の理想は、上下一心一體、我等臣民、同胞共通の大宗家たる皇室の皇祖天照皇太神、皇宗明治天皇を中心として歷代の祖先に對し奉りて、大忠大孝、衷心より敬虔、崇敬の眞心を表し、至慈至醇の生ける皇國の大道を明かに辨じて、彌か上にも此道を鼓襄發揚し奉りて、世界的文化の建設に勤しみ、孝道卽皇道の大義を四海に布くの自信をたてねばならぬと思惟するのである。ことし秋十月、たまたま、朝鮮神宮鎭座の御盛儀に瀆遇し、感激のあまり、卑懷を述べて自戒となすと云爾。

天の下あまねくてらすおほみやの千木たかしれり南山のそら。
すめくにのみおやの神の二柱こゝにいはひてまつるけふかな。

◇煙を吹いて

平田久雄

大同生命の高槻支店長は、保險界での論客である▲その朝鮮統治論などは、一家の見を具へ、頗る傾聽すべきものがある▲先づ第二の橫田龍三郎氏――保險界切つての快男子だらう。

父に崇敬の誠を捧げ、祖先の名絶の興國の御大業は、遙かに皇祖太　　快男子だらう。

廣告外交

石川久臣

新聞や雜誌の廣告外交といふものが、どれ程一般社會から嫌はれてゐるか、背廣服にカバンを抱へた人間がその店先に立つと、先づ大概の場合は門前拂ひ。それも體の良い門前拂なら腹も立たぬだらうが、見え透いたやうな嘘つ八を並べて、いけぞんざいな應對をされるとなると、大抵の者だつたら烏渡舌打位では腹の蟲がおさまらぬのも強ち無理はないことになる。

新聞や雜誌の廣告外交は、須らく所轄警察署の證明書を持參すべしといつた意味の張り札が出してある堂々たる家があるかと思へば、新聞の外交員○○といふ男、斷然面談相成がたしと臆面もなく玄關に張り出されてゐるのが最近目についた。何でもその內容を聞いて見ると、廣告勸誘に行つて大變に其處の御主人公の機嫌を害ねた爲といふ話。內譯を聞けば無理からぬ點も強ちないではないが、何も麗々しくそんな張り札を出して、必要以外の人間にまで見せつける必要はない、何だか妙にその家の主人公の度量の狹さが見え透かされるやうで、寧ろ氣の毒な感じがせぬでもない。

新聞雜誌の外交員との面談は毎木曜日午前中と、先祖何代以前からのおきてでもあるやうに確然と取り定められた大きな店がある。その木曜日以外には誰が何と云つても絶對に面會しないんださうだ。又これと略同樣なのに、外交員の受けつけは毎日午前十時より十一時までの一時間、それ以外には主人がいくら暇があつても決して應對せぬといふ定めの店が本町にあると聞いてゐる。この二つなどはどちらかといへば、むつかしい方ではあるが却つて外交員には都合がよく、所定の日、所定の時間に用件を達する事が出來て都合の良い方だかも知れない。

一日私の外交員は、何でも京城驛から程遠からぬ某商店を訪問して、其の家の主人から高等乞食だと放言され、大に立腹するかと思つたら、乞食の上に高等をつけられてせめてもですとニヤコリ笑つて歸つたとの報告を受けた。だん〳〵調べて見ると、そこの主人といふのは新聞なり雜誌なりに、未だ曾て殆んど廣告なんか出したことのない男だと知れ、押へ切れぬくすぐつたさがこみ上げて來たのだつた。

考へて見ると市內到る處に斯うした話柄が傳へられ、その他擧げ來ると數限りがない。一體これは何方が悪いのか、廣告を募集に出かける外交員が悪いのか、それとも此等の外交員に接見する廣告主がいけないのか所謂蛇蝎の如くに嫌はれてゐるといふ、新聞雜誌の外交員なるものが向後はすつかり態度を改めてかゝる必要があるのだらうか。

何等の社會的地位も與へられねば、更に言論機關としての背景も持たぬ私の雜誌の如きに居る外交員が、案外好意を以て迎へられて居り、且つ相當の成績が上り得るとすれば、十中の八九までは、廣告主の側よりもコツチに非點が多いのではなからうか。

私は近頃そんなことが痛切に感じられてならないのである。

◈金剛如意記

平田久雄

龜屋から今度賣り出した金剛如意といふ奴を貰ふ▲頗る氣に入つて、東京から來た友人に見せると、その男も『フーム、これは面白い、僕も二三本買つて行かう』と土產物に買ひ込んだ▲材料は、白檀で、强い芳香があり、それがいつまでも消へぬといふのが特徵▲金剛經の文句が彫つてある、曰く心如金剛、堅固不動、撞邪顯正、泰道感亨……荒井石禪師の筆である▲それで買價僅に二圓五十錢▲此外に龜屋には金剛杖、金剛ステツキ剛砧まである▲も一ツ近ころ面白いのは、金剛柏子巢といふ巢子▲例の松の實でつくられ、それを朝鮮特有の蜂蜜で固めてある▲何よりその薫りがいゝ▲內地土產には、最上の品だと思ふ▲兎に角、續々新考案を立てゝ行くところ、敬服々々。

秋日雜記に寄す

東京　丸山鶴吉

△

松本さん

私は今夜東京郊外の比較的閑靜な自分の書齋で、痩せ衰えた浦淋しい虫の音をきゝながら、十月號の『秋日雜記』を幾度となく繰返して讀みました。そして込み上げて來るやうな懷かしさに堪え切らないで、そのまゝこの筆をとりあげました。

△

松本さん

名殘惜しい朝鮮にお別れしてはや丁度一年になります。それがあなたが言葉を盡して、讃仰せられる秋の初めであつた丈け私共の思出は一層深味を覺えるのであります。單なる廻り合せに過ぎなかつたにしても、この秋といふ時節に朝鮮を去つたことが、仕合せであつたやうな感じが致されます。

△

松本さん

秋！、そして朝鮮！、これがどうして忘れることが出來ませう。この頃都大路の俗塵を浴びて、地獄の往還を見たやうな騷々しい町筋をたどり歩いて居るときに、明快な碧空よ清涼な大氣よ、悠々たる山河よ、懷かしき朝鮮の秋よと思ひ浮べられてなりませむ。疲れ果てゝ電車通から暗い細道を家路に急ぐ夕などは、ふと砧の誘ふやうな音を偲ぶことがあります。そんなことを思出す度毎に皆さんのこの頃の御生活を心から羨ましく感じます。

△

松本さん

かくまで懷かしい朝鮮を、義の爲め身の爲めに、振切つて出て來た私は、相變らず落付きのない馬鹿忙しい、日暮を送迎して居ります。それが大して世道人心に反響がない事である位は自覺しないでもないが、只何かしらじつとして居られない心持と、一種の自惚とに引摺られて兎も角も動いて居ります。

△

松本さん

現在の日本にはすることが一杯で、又せねばならぬことが眼の先きに山程あるやうで、そしてすべき、せねばならぬことの標的は大抵明瞭であるが、然しそれに達する道筋と方法とが見當らないで苦んで居る。これが若き日本の悶えであると思はれます。私も悶えます私の多くの友達も悶えて居ります。そしてお互に力の足りないことを歎じて居ります。

△

松本さん

私の今多く關係して居る仕事は、この悶えとこの歎きに心から苦んで居る友人達と、せめて語り合ふて少しでも力を養ふて行きたいといつた方面のことであります。當面の問題には何等の野心も、希望も寄せては居りませむ。かくして強い信念の下によしそれが遂に實現するときがないにしても、この心友だちと結束して起つときを樂んで、喜むで忙がしい生活を送つて居ります。

△

松本さん

私が新日本同盟に働いたり、政治教育協會に關係したり、日本青年館や、大日本聯合青年團を世話したりして居る心持は、これで御諒解して下さると思ふ。かくして忙しい私はいつも朝鮮を想つて居ります。朝鮮の秋をかくも力强く描かれるときに、たまらなく懷かしさを感じさして戴くことは、確に私の生涯の特權であると歡んで居ます。

松本さん

『京城雜筆』が益々充實して來て、あの麗はしい朝鮮の津々浦々に、柔らかな、濃やかな、溫かい氣分を種蒔かれて居ることを思ふときに、一層その使命の意義を自覺されたことゝ思ひます。益々御自重御自愛專一に祈ります。

思ふところ

永樂町人

◎

私は、夜分來客のない時は、スグ床に就くのである。

七時に、やすむ時もあれば、八時をうつてから床に就く時もある。

床に就いたとて、そのまゝ眠る譯ではない。唯だからだを安泰かにして、そこで、本を讀むのである。

實際眠る時は、不定であるけれども、十二時前といふことは先づないのである。

◎

いかにもお行儀の悪い男で、机の前に、正坐して本を讀むといふことが出來ない。亦た書間ゆつくりと物を讀むといふことが出來ない。この十數年、きまつて寢てから讀書する。その方が容易に理解の目が働くやうに思ふのである。

◎

この間も、日がくれると、スグ床を展べて、その上に横はる朝からふり出して居た雨は、依然としてしと〳〵と、庭の暗い土を叩いて居る。

いかにもしづかな夜だ。

すると、かすかな、陰々たる鍾の音が響いて來る。

一體何時だらうと、時計を見ると、マダ七時である。早いなアと思つて、私は讀書の手をやめて、煙草を一服したのである

◎

私は、その時、無名氏の幸福といふことを、はからず考へたのである。

午後七時といふと、世の有名氏の、花月に於て、千代本に於て、京喜久に於て、まさに宴會の開會を、待つてる時間ちやないか。そして、それは、かなり退屈であるのみならず、然るのち紋切形の挨拶、千篇一律の謝辭、それから相も變らぬ料理と美人とが陳列される。そして、彼等の解放されるのは、先づ十時、十一時であらう。しかもそれが日々のことであり、夜々のことであり、斷ちがたき名譽網であり、彼等は、絶對に吾れ吾れのやうな安靜と、自由と、氣樂とは、有たぬのである。私は全く世に顧みられざる男の幸福——を思ふと同時に、かの御苦勞千萬なる世の所謂有名氏を憐まざるを得ない。

◎

社友のK氏や、T氏が、時々遊びに來て、盛んに文章論をやつてる時がある。

何心なく聽いて居ると『だれそれのは新しい』『だれそれのは古い』といつて居る。その外に、はかりの標準はないのかと注意して居ると、別にありさうな模樣もない。

至つて、簡單なる文章論である。

◎

文章は勿論、新しいのがいゝ。それは、日本家屋よりも、南大門通には、洋風建築が似合ふといつたやうなものであらう。

しかも、文章論の極意は、決してそれで盡きたとはいへない

作者の一つ〳〵のいきが、作者の一つ〳〵の脈搏か、いかにその文面の上に、くつきりと出てゐるか否かゞ問題であらう。

新しい……といつても、人間には、四十男もあり、半白先生もあり、まる禿げ居士もある。更に性格上にいろ〳〵の差別がある。それらの人が、めい〳〵自分々々の文章を書かずに唯だ新しいといつて、活辯まがいの文體を、誰も彼れも書いたら、ズイ分變なものであらう。

服裝と同樣に、ぴつたりと身に合ふものを書くこそ、上手下手は兎に角、マジメなものと尊敬するに足るのではなからうか

◈よもやま帖

平田久雄

◎東拓東京本店の黑田庶務課長は、大學を出る時、銀時計組だつたといふが、今日では、東拓隨一の花柳學者で、新橋の何子は元と名古屋に居つた、そのころの旦那は誰で、客イロは何某だつたといふやうな系統圖をすつかり覺えて居るといふ。

◎ところが、近ごろその方は全く卒業したのか、カフエー漁りに興味を有ち、どんな雨の日風の日も、尾張町ライオンに姿を見せぬ日はないといふ。これで亦五六年苦勞が入りますな。

眞の雜筆(一)

醫學博士　渡邊晉

思ひ出したことを其のまゝ書きつける眞の雜筆である、かりに番號を附けて置くが、何番まで書けるか自分にも今は分らぬ、思ひ出してはすぐ消えて行く幻を紙上に留める機會を與へられた『京城雜筆』に感謝する。

（一）　榮養分の不備と、產米の不足から日本人は純白米食を改めねばならぬことは既定の事實である、近來半搗米、原米、雜穀混飯、パン食等が研究せられるのは結構である。

其の內のパン食は現在の日本ではすぐ飽きが來て永續がしない、洋行すれば三度々々パンで嚙つらかろうとはよく聞かれることである、然るに西洋のパンは三度々々でも飽きない、美味い、そこに相違の點があらねばならぬ。

私の見る處では、西洋のパンと日本のパンは、材料は同じでも出來上りが異つて居る、日本でパン屋から買ふパンは、燒き方が不足である、米飯に例へれば生煮飯で從つてパンの消化が不良で、パン固有の芳香と美味とを具へて居らぬ。

私は滯歐中胃腸を惡くして、日本式にパンの皮を棄て、中味丈け食べて居た、夫れを見附けた家の主婦が、ドクトル！ドクトルは醫者の癖に腹の惡いに、何故パンの中味を食ふ、こちらではそんな時には却て皮の方を食べます、と注意せられた、之を動機に研究して見れば、成る程充分に燒けた處の方が消化がよい、芳香美味である。特に病人用として、二度燒パンと云ふものも賣つて居る、蓋し充分に燒けた澱粉質は既に消化の一階級進んだものであるからである。

日本のパン屋は燃料の節約が出來て、色が白くて目方が減らぬ未成品に近いものを供給して居る、パン食に就て經驗の少い御客樣はそれを本物のパンと思つてパンはまづいと悲觀して居る。

（二）　鍾路通から宮殿の正門を遠望すれば、景福宮の光化門。景德宮の敦化門。大廟の正門何れも皆門の中央直上に北漢山の普賢峯の岩山が聳立して壯嚴の偉觀である。其の爲めに敦化門通も大廟通路も鍾路に直角ではない。蓋し漢陽奠都の都市計畫に際して王宮の營嚴を顧慮したものと思ふ。

（三）　今日は暑い九五度だ、今日は寒い零下二〇度だ、と云ふ寒暖計の度の標示が、前者は華氏で後者は攝氏、不統一な習慣になつたものである、異つた形式の文明を採用してまだ充分に消化しきらぬ變態の一つ。

（四）　十二月生れの赤坊が元日には二歲、一週忌から一年經つて三回忌、一年一ケ月でも年を跨ればもう在職三年と來る、粗雜な算法である、東洋文明の跨張式？。

（五）　生命及健康の源は太陽光線にある、黴菌の繁殖は陰濕にある。此の點に於て朝鮮は天與の健康國である。

呼吸不充分なれば血液汚れ、尿道惡しければ尿毒起り、便通不良なれば種々の中毒作用あり、蓋し人體に最も有害なるものは人體自身からの廢棄物と病菌とである。

此の意味に於て我々の住宅を顧みよ下水は近く家傍を流れ、汚塵糞尿は宅內に醱酵して居る、更に眼を廣くして大京城を見よ、北から流れる下水は黃色を呈し、黃金町は運搬車からの餘滴で名詮自稱夫れを捲き起す自動車の塵粉、加ふるに汚物處分場、火葬場等は住宅地に隣接して、其臭惡、其有毒瓦斯は住民を苦しめつゝある。

かくして吾々は天與の健康地に於て、人爲の不衞生に活きつゝあるのである。

（六）　美しい染模樣のメリンスの單衣は幼兒の夏の晴れ著である、然るにメリンスは毛織物であるから體溫を傳導し身體を涼しくするには最も不適當である、メリンス以外には美しい模樣の手頃の切れ地が夏物に無い許りに幼兒が犧牲となつて暑さに苦しむ。

（七）　男は帽子をかぶる樣になつたが女は昔の儘の裸頭である顏面が遮蔽なくして外界に曝露して居れば寒暑烈日に抵抗して皮膚の組織に變化が起り、早老して外觀が甚醜くなる、其の標本は船頭や農夫の顏である、女が顏を大事にする積りならば帽子が男よりも更に必要である。自髮製のピンツケ帽子は不潔に陷り易い不適當なものである。

◇私なども、恩師から、常に捨

捨て石

中村健太郎

◇私は、最近友人の某君から、尊い教訓を受て、思はず合掌した。

◇某君が、年來心血を注いだ、或る團體がある。近來それがメキ〳〵と發展して、地方の要衝の地に、支部を置くことゝなつた。

◇其の團の顧問に、思想界の權威である所の或る名士がある。其の名士が、今度遙る〳〵内地から此の地に來て、其の支部の發會式に臨み、且各地に講演を試み、到る處に於て多大の感動を與へた。

◇此の報に接した某大官は、某名士を主賓として、一夕其の團體の幹部を招待した。

◇此の招待は、其の團體の幹部としては、無上の光榮であらねばならぬ。といふのは、其の團體が創立されてから、既に五六年にもなるが、斯くの如き招待を受くるのは、實に今度が初めであつたからである。

◇然るに最も熱心な某君が、獨り其の招待に預らなかつた。某君の如き、尤も深き關係のある幹部の一人が、洩れたといふことに就ては、何人も不思議に考へた。

◇某君といへば、此の團體を、自己の生命の如く考へ、全く寢食を忘れて奔走し、其の團體が、今日の發展を見るまでに盡した功勞は、決して少いとは謂はれない。

◇同じく自分と苦勞をして來た他の幹部のものは、皆此の名士の陪賓として、面目を施してゐるのに、獨り其の中に加はらなかつたといふことは、如何に某君が、超越した境涯の持主であるにしても決して好い氣持はしなかつたらう。殊にまた東京支部の主任となり、今度初めて本部に出頭した某君と共に其の席にあるのに、本部幹部の一人として、其の席に列らなかつたことは、何としても同情に値するものと謂はねばならぬ。

◇然るに最近、某君は、飄然として私を訪ねて來た。そして曰く『僕はなぜ心から捨て石に成れないだらう?』と。

◇平素物事に無頓著な某君も、今度ばかりは、自己の立場を考へて、色々と煩悶したらしい、それは勿論本人以外には、何人も知らないことであつた。即ちそれは某君の精神上のことであつた。

◇然るに某君は、平素修養にも志し、相當道心も堅固であるべく自ら信じて居つたのが、今度のことで、まだ修養が足らぬといふ事をシミ〳〵考へた結果、精神上の腦みを告白したのであつた。

◇『ナゼ捨石になれないだらう』?、某君は、繰返して之を訴へたそして僅かこれしきのことに道心が動搖しかけたのを見ると、自ら恥ぢざるを得ぬと迄言つた。

◇何といふ尊い告白だらう。私は思はず合掌した。

◇私なども、恩師から、常に捨石になれ、捨石ほど尊いものはないぞと、常に垂誡を受けてゐるがイザ鎌倉となると、中々そうは行かない。自ら省みて慚愧に堪へぬ

◇加藤清正の築いたといふ名古屋の城は、どうでせう。既に三百年も閲してゐるが、大地震に出逢つても、暴風雨に吹きまくられても、少しく動かないで、巍然と雄姿を見せてゐる。

◇如何に清正が、一心を込めたとは云へ、その土臺が確かりしてゐなかつたならば、城は傾いてゐたに相違ない。深く地下に埋もつてゐる捨石の隱れた力こそ、あの城のビクともしない大眼目となつてゐる。

◇それに就て、面白い話がある昔、黄蘗宗の開山隱元禪師が、諸國巡錫の途次、名古屋に著いたので、城見物に往つた。

◇初めは金の鯱鉾が立派だとか石垣が巧く疊んであるとか、格好がよいとか謂つてゐたが、上から段々下にドつて、お堀の水の中を見たとき、禪師はハラ〳〵と涙を流すかと思ふと、眞面目になつて讀經を始めた。

◇お伴の小僧が、不審に堪へず其の理由を聞くと、禪師は『よく考へて見よ、彼の立派な城は、人に見へぬ土臺の下の捨石の力ではない乎、人も捨石ほど尊いものはないぞ』よと。

◇仙臺萩の千松は、主人の爲に捨石となつた。赤穗義士は、判官公の爲に捨石となつた。古今東西大事業に成功したものは、一として捨石の力でないものはない。

◇私は、某君の告白を聞き、その尊い内省の叫に對して、合掌せずには居れなかつた。

雜筆を讀んで

朝鮮及朝鮮人主筆　拇澤四郎

松本武正君の京城雜筆には、所謂筆に素人のお歴々が各方面から盛に寄稿をして居るので、頗る興味が深いものである豫期せざる人に案外の文才があり。畑違ひの方面に玄人をして素足で逃げ出さしむるのが多い。

殖銀の秘書課長の守屋氏は銀行屋を勤め乍らも流石に文學士だけに文筆の人として先づ京城で指折りの一人でなければならぬ、京城雜筆に毎號書いて居る京城徒然草の如きは筆で濟世の新聞記者連に容易に眞似らるゝ所ではない。同じ銀行屋で、鮮銀の飯泉氏の筆は、氏の氣象通りに短刀直入、何等の粉飾を施さずユーモアの多い、そして表顯の赤裸々な所に却つて面白味がある。

更に鮮銀には俳人だけに松原純一氏の筆が頗る整つたものだ、飽く迄も落著があり、洗練されて居る。岸巖君は羅馬字の研究家だけに氣の利いた文章を書き、東京日々社に記者を勤めた經驗家であるだけにソツがない。

東拓の志村四方一氏は飽く迄も整つた才子風の文章を書く同社の理事尾崎氏は、短歌には頗る若り返法を施した艶麗サを發揮する才人である。

法學博士では、李王職の篠田次官が仲々筆豆で、しかも人格通り重厚で、少しも厭味のない筆を持つて居る。

豫期せぬ文筆の人は、京城府尹の馬野氏である。京畿道警察部長時代の歐米視察の旅行記に、官界多年の感想錄を添へて『浮草の半生』と言ふ著述があるが、著眼もよく頗る整頓された文章である。綿入りの俳句や和歌の盛り澤山なのが難であるが、役人の著述として確かに秀逸と言ふべきで十人並以上の文才を持つて居る。

京城覆審法院の伊藤憲郎氏の筆は、司法界に居る人に似ず頗る枯れて居る。其の想と言ひ、材題の覗ひ方と言ひ、筆一本で充分に濟世の出來る人と思はれる（十月號朝鮮及朝鮮人）

僕の手帖

〔二四〕

川尻非空

◎この間、朝鮮火災の社長河内山さんを、その錦町の邸宅に訪ねたが、向ふは百錬千磨の手取相撲こつちは、雜誌記者の名刺を有つてマダ五日と經たぬ駈ケ出しの悲しさ、思ふがまゝに、小手先であしらはれたのは、我れ乍ら大汗びつしよりの次第である。

◎『洋畫はお好きですか』『嫌いぢやないが、わからないネ』『日本畫は、いかゞです』『さつぱりわからんが、人が買ふから僕も時々買ふ』『どういふ御趣味がありますか』『まるでない、ほんとの野人だ、われ乍ら肩身がせまい』先づザツトこんな調子。——歸途僕つく〳〵思ふ樣、なるほど新聞雜誌記者といふものは、ハタで思ふやうにラクぢやないと。

◎日蓄支店に大須賀氏を訪ひ、話を聞く。頗る簡潔、頗る明快である『樂み…山に登ること…嫌ひ…殺生をすること…。書、懸命に仕事する。それで、なし終へなければ、夜十二時までやる。夜間、ヒマがあれば鮮語を習ふ、そして大須賀さん大マジメになつて曰く『僕は極力使用人を愛する、使用人も亦僕を愛して居る。僕は藝妓を愛する、藝者も亦僕を愛して居る…と思ふ』と、兎に角ザックバランな痛快な人物である。

◎漫畫家の笠原氏を伴つて、古河の水谷さんを訪ふ。すると、水谷さん、眞劍に手を振つて『それば〻かりは勘忍してくれ給へ、外の事なら原稿でも何でも書く』諸君！。水谷さんマはダ御結婚前なのですか。

▲性の天地は感覺不變の自由鄉也
▲束縛迫多き世に、人の享樂に

晩秋獨語

今村　鞆

▲性の天地は感覺不變の自由鄉也　羈束壓迫多き世に、人の享樂に趁るば勢也、頽廢とのみ不可見

▲今日の社會に封建其儘の武士道の必要を說く人は、厨に石斧石刀を用ゐて刺身を作り得る人也

▲天下は糞也人間は蛆也、蠅を成効者と云ひ、自働車の羽音を立て、政治實業待合の腐臭に飛ぶ

▲ソクラテス――ガリレオ――進化論裁判、人間の愚が大昔も今も渝らざるを、新に吾人に誨ゆ

▲人生は愚の羅列也歷史は愚の經緯功程也、世界大戰は愚の最大發揮也、然而して人未だ覺らず

▲畢竟人間の愚性は遺傳也、而も優性遺傳也、悠久綿々相傳へ衆愚相率ひて斷崖に赴く、可諦歟

▲人類愛は動物愛に根す、動物を屠る所人愛の發達なし、佛の殺生戒は此點に徹底せるものなり

▲權威の力は、僅に當面の驚愕と擬裝の匿伏を作る丈の、甚微弱なる、而も一時性のものである

▲衝突とは、二個の物體が同一空間を塡充せんとする物理現象を謂ふ、三角戀愛は其適例の一也

▲外觀を壯宏にするは尊敬押賣者の常套手段也、されど愚昧に對する外古今成効せし歷史を見ず

京城雜筆

▲『僧が生れつきの禿ならよかろふに』斯樣な類ひの事を考へる人達を、敬稱して理想家と云ふ

▲宗敎と鴉片其毒のみを觀、共產主義と砒素其藥効のみを考へた隻眼の人、其名をレーニンと云

▲死の間際迄、自己の愚昧を世に曝し、終りを全ふする者は、獨り猫入らずの自殺者已に限らず

▲宇宙の神秘を發かんとして努力する科學者と、湯屋覗きと稱する痴漢とは、思想的に親類なり

▲言行一致と云ふ事は、大臣にも誰にも望まれぬ事柄なり、舌と手足が別個に存在せるからには

▲人間は好んで不自由を欲する者也、金持が華族になりたがる如く、花嫁が放屁をこらへる如く

▲よき年は靑春也、老人をイイ年と云ふは死んでもイイ也、未亡人の未亡は一部分也、と或人曰

▲『願くは輕羅となつて細腰に纏はん』此詞程、男の弱點を正直に赤裸々に、告白せるのは無い

▲如何なる名畫も遠くヲソクヅの畫に及はず、是生の焦點に觸れて萬人の官能を灼熱すればなり

◈合財ふくろ

吉田莊一

◎渡邊晋博士は、學者風の、頗るのわがまゝッ兒である。原稿の件に就て、記者は何度叱られたかわからぬ。

◎この間も、原稿の催促に行くと『十二日といふ約束ぢやないかその前にチョイ〳〵顏を出されると、感興をそがれてこまる。十二日には屹度屆ける』氣性を知つて居るので、ハイ〳〵と引きさがる

◎處が、そこは學者だ、いつたことは間違はぬ。十二日午後五時となると『よろしい、さア持つて行きたまへ、これをあげますよ』全く小氣味のいゝ博士である。

◎筑前琵琶の師匠が、市內に雨後の筍の如く、八十何名あるといふ、この中で女流師匠の古いところ曰く村旭汀、曰く本多旭映……それから男で古いところ、曰く合原旭天、龜川旭江……等、等、等

◎たゞし實際うまいのは？といふと、或る人そつと敎へて曰く、爪生旭扇、小野旭枝かね……と。男かい、女かいと訊くと、ウンどつちも女だよ。

◎薩摩の振はないのは惜しいものだ。是はいゝ師匠がないので……まア當分の間、蓄音機の錦心でも聞いて居るんだな。

供養

井上收

亡愛兒廸女が七回忌の手向草に、貧しい父が思ひ出の數々を綴り、同憂の方々に差出す筈の追憶錄の一節であります。既に印刷に廻さなければならないのですが、多年私がその保健を自慢にしてゐた、澤山の子供達がこの暑中休暇に全部病院通ひといふ、首縊りの足を引張らるゝやうな苦しみの餘、まだその運びに到らないのです。引續ひてこの夏は、實に息苦しい日を送り、諸方から御依頼の原稿も御無沙汰勝になつて居ります。この雜筆誌上にも、借金があるやうな氣がして、氣が咎めて居る處へ、御催促を受けましたので自己陶醉のいやな文字でありますが、子供を亡くされた方のみの御覽を得ますれば、何よりの光榮と存じます（一四、一〇、一一夜）

◇

今年は愛兒廸女が、七回忌に相當いたします、八月廿六日の朝まだきです。彼女がこの世を去りましてから、忘れてはすまない〳〵と思ひながら、貧しいその日のたつきに追はれ、祥月命日さえも忘却いたして居つたことが、足かけ七年の間、全くないとはいへない不心得な親であります。

先立ちし子は佛なり教へずは迷ひ果つべき親の心ぞ（性空上人）

これは和泉式部が、その愛女小式部の長逝から、思ひ惱み、性空上人の教をこふた時、最後に與へられた、上人の悟道の詠であります全く私達（夫婦の者）は子に教へられて迷ひの夢に氣づいては、苦しい生を續けて居るのであります亡くなつた廸女は私達にとつて、寒にありがたい善知識であります

東京にゐた頃、それも中學時代に、歌の先生で憧憬してゐた、落合直文、鹽井雨江の先生方は皆今は故人でありますが、その詞藻の内に現れた、子を思ふ歌といつた追懷味には、今も靜かな嬉しい涙がさそはれます、とりわけ雨江先生の息子さんの亡くなられた折に『末練』といふ手向があります。

我子は、我子は、いづこまで、死出の山路を、死出の山路を、いづこまで、氷れと許り冴えわたる今宵の空に、つらかれとのみ吹きすさぶ、この夜嵐に、越ゆるか、獨り山路をば、辿るか獨り、よみぢをば。我子はや、我子はや。抱かれむ父の膝はなく、添へられむ母の乳房はなくさこそはわびしき旅にして、悲しや我子、可愛や我子、抱きてとばかり、今頃は父やよぶらむ乳よとなきて、今頃は母やよぶらむ、追ひしきて、疾く追ひしきて、今一度抱きてもやりたや父の膝に、添へてもやりたや、

〔二六〕

母の乳房を、可愛や。我子、いづくに我子は。

この後に綿々たる慈父の情の詞が長く〳〵續けられゐて、涙なしにはどうしても讀めない、讀み續けやうとすれば、眼は涙に曇つて、讀めない、安價な感激、安ッぽいセンチメントなどゝいふやうな輕薄なものではない。

眺めつゝ只眺めつゝ今日も又我子還らず日は暮れむとす（雨江）

聞まほし戀しのあ子に今一度せめて今はの其泣く音をば（同人）

考へて見れは、生き遺つた親が、その子を戀ふといふことは、親の愚痴に過ぎない、然し尊い愚痴である。この愚痴のほとばしる度に亡き子は甦へる。親と子の親しい對面が出來る。死んだ子の歳を數へる、といふことは、愚にもつかぬ繰言のやうであるが、眞劍な大事で、生きて居れば、もう何年生もうお嫁入りの仕度、何につけても淨化の一境ばかり、かうした純眞の緊張に味到する機會は、人間一生の間にもさう澤山はない、年を經るまゝに忘れる、去るものは日に〳〵疎いといふ言葉はそら言である、年と共に追慕の情はいやますものである。

破る子のなくて障子の寒さかな　千代女

蜻蛉つり今日はどこまで行つたやら　同人

この思慕は、必しも亡き者へのみの、追憶ではなく、生ひ立ちつゝゆく愛兒等への、親のよきめざめである。私は因果律や宗教概念で子供の早逝を運命づけたくない、人間發達の初期にある子供が、徒らに死ぬ譯はない、自分で自分を處理できぬ子供の身の上は、すべて親の責任である、夭折させたの

は與つて親の手落であり、親の罪　子の冥福を祈りたいと思ふ。ほん　上、何も説明する適當な詞がなか

先立ちし子は佛なり敎へずは迷ひ果つべき親の心ぞ（性空上人）

京城雜筆

は與つて親の手落であり、親の罪である、と深く私は亡き子へ詫びて居る。せめてはその子を忘れぬことに於て、熱い涙に於て、我子に怨して欲しいと願つて居る。カーライルも既にこのやうに曰つて居る。

"O ye loved ones, that already sleep in the noiseless Bed of Rest, whom in life I could only weep for and never help" (Carlyle)

もう靜寂な憩ひの床に眠つて居る處のいとしいものに、私が盡し得たのは、只泣くといふ一事である。

とほんとうに泣くことである、熱い涙を手向ることである、その涙の閑に我子と會ふ、そしてせめては罪深い現世の生活を淨化し、我子の冥福を祈りたいと思ふ。ほんとうに人間が、この世で泣くことの出來るのは、幼いものとの哀別である、拭ふてもく、とめどなく落る涙、罪障の深い身が、この淨い涙でいかばかり淨化されるか知れない。

ついまだ二、三日前のことである、私の附屬小學に通つて居る娘の幼稚園の友達で、それこそ天にも地にもたつた一人の愛娘のたかちやん（本町喜久家）といふ人形のやうな美しい子が亡くなつた。その告別式に、そのお友達の娘を伴れて、旭町の護國寺に參拜した私の娘から『たかちやんは、どこにゐるの？』と質ねられ『もう骨になつてその佛樣の前にゐるの』といふと『骨になるつてどうなるの？』と追求されたが、もうこの

きて、今一度抱きてもやりたや父の膝に、添へてもやりたや、

處理できぬ子供の身の上は、すべて親の責任である、夭折させたの上、何も說明する適當な詞がなかつた、その折施主は參拜した子供達へ殘るくまなく、供養といふ札の著た菓子を出した、この供養といふ文字が、何でもないやうなものゝ、娘が手にして居るのを見ると、全く耐らなく熱いものが瞼の間にあふれる。私のやうに食ふに困るほどの子を持ち乍ら、その內の一人を亡くし、既に七年も過ぎまだその子の姿が忘られないのにたつた一人の愛娘をそれも花の姿の娘をなくし、參詣者の子供達へ供養と書いた菓子を贈る親の心は涙なしでは思ひもやれない、涙！涙！、この涙より外に亡き者へのよき手向はない、とそれこそ私は微笑むで泣いて歸つた。

朝鮮神宮鎭座祭恭賦

學鬪　松田甲

彷彿神玆格。東方紫氣新。響雲天保頌。擊壤子來民。楓葉映晴日。菊花開小春。玉鑾鏗緩度。大道絕浮塵。
雙鶴鳴華表。氣秋凉滿天。闔闢懸日月。鎭壓鎭山川。威遍十三道。磯堅千萬年。繞垣松柏綠。靄靄簇祥煙。
紅日出東海。彩霞敷四方。連綿皇統繼。炳燿國威揚。忠勇自鴻古。慈仁凌列强。偉哉天祖德。寶鏡放神光。
明治聖天子。黃麻宣德音。溯源千載上。固本一家今。邑里恩光遍。江山殺氣沈。階前齊稽首。誰不捧丹心。
督府施新政。同仁撫萬生。風雲全掃蕩。草木總欣榮。抃舞迎神駕。歡呼滿漢城。老軀無限喜。紀盛頌昇平。

◇筆のしづく

吉田莊一

大和町のド田洋服店のおやぢは、面白いといふ評がある▲駈け出しの新聞雜誌記者が、洋服がない……といふと、それなら下田洋服店へ行けといふ▲そこで、新米先生ド田洋服店へ行くと、『どこの社だ……ウン、ウン』といつた調子で話を聽いて『ようし、俺が作つてやる。金が出來たら拂へよ』初めて會つた男に、作つてやる▲そしておやぢさんの氣焰談が面白い『よそでは、新聞社員に引ツかゝるといふが、俺ははそのワケが解らぬ、俺は十何年ヤツラの面倒を見て居るが、マダ一人だつて、俺に迷惑をかけたものはない』宛として下田大親分！といふ氣取である。

歸省雜記

榎本隆

京城雜筆

南海電車が、孝子墜道を拔けると、間もなく伏虎城が目の前に突つ立つて見える。あゝアノ天主閣の麓で、中學五年の間育まれたのである。

今夏の滯在四十日。

雜感三四を記して見ませう。

鎭守の森

いろ〳〵の傳說と、愛鄕の表徵として、感興深かつた鎭守の森が田畠と化して居る。

戶籍騰本戰

今夏、私の縣で行はれた、所謂多議選擧戰には、候補者二人とも其閱歷、人物、金力等の點を比較すると、力量相匹敵して居たので火の出るやうな大接戰であつた。從來有權者は十五人であつたが、今回から百人となつた。其百人の新舊有權者が、海岸線五十七里の全縣下に、群雄割據して居るので是れを一堂に集めて、意見を發表するといふことは、到底不可能である。是に於て所謂戶籍騰本戰なる新戰法が發明せられたのである各有權者の戶籍騰本を取り寄せ、各廻戚關係を調査して、適當なる緣故者を差向ける方法である。

プロペラー船

八月半頃、急に思ひ立つて、曾遊の靜八丁に遊ぶために、九里峽を溯上したときのことである。

飛行機の小型プロペラーと發動器とを、川船の船尾に据付けたもので、プロペラーの回轉に因る風壓作用に依り、船を前進せしむる方法で、從前は空船を、屈强な船夫數名で、二日間も掛つて曳いたものだ。處が今度はアノ急湍激流の長峽を、たつた三時間足らずで而も淺瀨をも平氣に、溯航し得たのには、少からず珍らしく感じた

併し此船の爆音が、自然に對する感興を、そぐこと夥しいので、わざ〳〵雨の一日を靜八丁の山亭に憩ひ、終日風光を眺め暮した。

小作爭議

私の國でも一時は群衆心理に支配せられ、騷かれた小作爭議問題も、其後地主小作人間に於て、歩合關係を比較研究の結果、相互に稍諒解を得たると共に、昨年來の米價の昂騰と、本春の麥作が數十年來見ざる豐作なりし爲め、小作人の財政好轉したるのみならず、本秋の米作も豐作見越の爲め、殆んど小作爭議の聲をきかなかつた

那智と華嚴

那智の瀧と華嚴の瀧、共に天下に名あり、之れを比較するも强ち無用の業にあらざるべし。

那智は其狀瀑布といひ得るも、華嚴は然らず。那智は高さに於て優るも、太さに於て劣る。

兩者に直面して、サブライムを感ずるは等しきも、華嚴に於て一層雄大の感深し。

那智の水源は川なるも、華嚴は湖なり。

那智は下より見上ぐるに反し、華嚴は上若くは中部より見下す位置に在り。

那智は文覺により顯はれ、華嚴は藤村により顯はる。華嚴は瀧其ものゝ風致に於て、那智に劣るも其水源たる中禪寺湖は男體山、足柄山を控へて、誠に天下の絕勝たる點に於て優る。

那智は其附近の景勝、到底華嚴に及ばざるも、瀑布の程遠からざる附近に、西國三十三所第一番の札所たる那智觀音の名刹あり、且つ其境內に續く高雅なる地域に、平安朝時代歷代天子の參詣せられたる官幣大社熊野十二社大權現の御鎭座ある點に於て優る。

村會議員

或村の村會議員補缺戰に、政見發表演說會があつた。當選者はプロ黨であつた。

◈鐵路經濟基

石川利夫

◎若曾禰さんに御紹介して頂いて、初めて大村局長にお目にかゝる、いゝお年らしいが、擧止輕快で、いふことがハキ〳〵して、ちつとも威張るやうな處がない。愉快な、いゝ局長さんである。

◎初めてお目にかゝつたんですから、紀念のため、何か書いて頂きませうといふと『ウン、さうか』といつて、さら〳〵と下の五言を書かれる。

鐵路經濟基。業產爲興起。

勿謂債資難。百年富强計。

◎長く支那に居られたのと、御自身の趣味とで、詩をやられるらしいが、それは味いといふ評判。

を溯上したときのことである。

飛行機の小型プロペラーと發動　兩者に直面して、サブライムを感ずるは等しきも、華嚴に於て一自身の趣味とで、詩をやられるらしいが、それは味いといふ評判。

南洋漫筆

市村毅

◎パパヤ、チク、マンゴ、マンゴスチンなどゝ熱帶地の果實には風變りなものが少くないが、その中でも忘れることが出來ぬものとしてドリアンがある、それは黃色で大型な然も見た處立派な果實であるが、その比類のない惡臭を嗅ぐときには恐らく誰でも顏を顰めずには居られぬだらう、片田舍の宿に泊つて居ると、時折生溫い風と共に何處からともなく此不愉快な臭ひが漂ふて來ることがある、そして最初は何だらうかと不審がるけれども現物を見せられて何れも吃驚する、然し臭ひは非常に惡くても一旦思ひ切つてそれを口にすると、餘りに美味いので、今度は何度も喰べたくなる相である。

◎寢臺の眞中に置かれた枕樣のもの、それは何の役に立つのか勿論解らなかつたので、最初の晩はそのまゝ餘計なものと考へて足蹴りにしてしまつたが、後で尋ねてダッチワイフを知らぬか、と散々笑はれたことがある、ダッチワイフ、譯して闇妻、只聞いたゞけでは誰しも何だらうと疑ふに違ひないが、現品を見ると何れもすつかり其期待がはづれて終ふ、夜寢冷えせぬ樣に抱いて寢るダッチワイフ、是も南洋名物の一つであらう

◎南洋あたりの稅關吏には隨分いかゞはしい連中が居るとか聞いたが、馬來半島で始めて其實例を見ることが出來た、と言ふのはトレンガヌ州から戻つてシンガポールの埠頭に上陸したときの出來事で、當時吾々のトランクは型の通り檢査場へ擔ぎ込まれ、正に馬來官吏のいかめしい監視のもとに私のトランクから先に檢査され樣とした、是を眺めて居た同行の某君そこは馬來事情に精通して居るだけに、早速ポケットから珍品を摑み出して、係主任らしい男の側へすり寄るや否や素早くそれを手渡し次で其部下へも若干を握らせたすると今まで怒つた樣に眼玉許り光らせて居つた薄黑いその男の顏には微笑が浮んで、トランクは何一つ檢査もされずその儘苦力共の手によつて再び外へ運び出されて了つた、彼の係主任が珍品を握らんとして腰の處へ手を差出したときの眼付と握るときのすばしこさとはその際呆氣にとられて見て居た私に對して今日に至るまでも忘れ得ぬ位深い印象を刻みつけたのである。

◎奧地に住む處のサカイ族とかダイヤ族とかの野蠻人以外に馬來の土人が著用して居るサロンと云ふ衣裳は極く簡單な圓筒形を呈し一寸前でたゝんで其一端をたばさむだけであるが、熱帶地の旅では忘れられぬものゝ一つである、兎に角日本の浴衣の樣に稍々もすると醜い股あたりが露はれる憂ひもなく、著て見て樂な上に涼しい點が何より好ましい、男はハイカラな連中かそれとも中流程度以上のものならばいざ知らず、大概の土人は此サロンで腰以下を隱し、女はその長いので乳房が見えぬ樣にして居るだけである、だが女共が外出するときには更に一枚のサロンを頭からスッポリ被るのを常とし、それが生娘でもあるならば如何にも耻かし相にその中に顏を埋め乍ら逃げる樣に通り過ぎて終ふ彼等の好む色は大方紅か黃であるが、肌がどす黑いためかそのうつりが頗る惡い。

◎南洋で通常鐵木とやら言ふ極く堅い樹を無雜作にくり拔いて造つた獨木舟は至つて無細工であるが、森林通過が極めて困難な奧地へ踏み込む旅人にとつては途中大方河を利用する關係上無くてはならぬ交通機關である、それは吃水が淺いために原始林の間を流れる川の底の如く處々大木の倒れ木のある箇所でも溯航することが出來る、曾て馬來半島東海岸の山奧へ鐵鑛と錫鑛とを探りに入込んだ友人某君などは瀨のある場所だけ獨木舟を土人と共に引擔いで何處までも漕ぎのぼつた相である、小さい時から訓練されて居る故か土人共は男女何れも舟漕ぎが巧みらしく、田舍を旅する人々はサロンを被つた花耻しい黑娘さんまでが舟にバナ、を滿載して山の奧から海岸へと物々交換に漕いで來るのを見かけるであらう、マングローブ林の間やニッパ椰子の繁みの間をスイ〳〵と進んで行く獨木舟の輕快な姿、殊にニッパ椰子やつぎだらけなサロンを帆代りにして走るその群などは慥に熱帶風物を代表するものであると思ふ。

京城雑筆

紅焔萬丈

廣江澤次郎

友邦赤露

秋空一碧、天高肥馬の候、ソビエット社會主義共和國聯邦京城領事館は開設され、赤色勞農旗は高く屋上に翻翻とし、一進一退、虚々實々の外交手段は免れずと雖も露都の日露細目協定も進渉し、且つ朝日新聞社の歐訪機『東風』『初風』の二飛行機は歐米各地、特に露國に於て異常の歡迎と、喝采を博し、今やロシヤは日本の友邦であり最近交誼日に敦厚となりつゝある、達眠の政治家は日支露提携を高唱の進境に到達した、赤露と云へば暴虐慘忍を聯想したのは過去の夢だ、七年前革命當時の事變は、日本の震災當時の錯覺と同一轍?、看過不問!、大雅量を示し餘り咎め立て詮議立てせず友邦として相互に禮讓を重んじ世界の平和と文化に貢獻したい者だ、私共は徒らに赤を恐るゝなく進んで彼が貴重なる身命、財産、精力、年月を犧牲とし漸やく大部分建設に成功した今日の社會狀態、政治組織を檢討し彼の長所特色のみ改造途上にある新日本の建設、大正維新の鴻業に資すべきである、而して皇室を富嶽の泰きに置き、且七千萬同胞を眞に安定せしむべ―だ今春東都櫻花爛漫たる時、國民翹望の標的たりし普選も通過し財界の整理も著々として進み政界の革新見るべきもの多き今日、國民として安閑として居られやうか。

其麼赤色

赤が何だ!、何が恐い?、郵便ポストは赤いじやないか、花嫁の長襦絆は赤いじやないか、高級功主大僧正連は赤衣即ち緋の衣を著るじやないか、雲上の女官連も緋の袴を著け仕へ奉つて居ると云ふじやないか、强風の日街上折ふし拜見するが娘の湯もじは大抵赤いじやないか、斯やうな赤色で思想が動搖する靑瓢簞は燒直すより外あるまい、能く溫泉場杯で湯上り美人が赤い腰紐でギユーツと腰の邊りを締め、ポーツと浮世繪の樣な阿娜姿を廊下でチラホラさせるが、拙者共は何ともない、煙草屋の軒看板を見よ赤地に白拔きの處へ黑字だ、レーニンとロイドジョージとムツソリニを同盟させた樣だ、床屋の看板は赤白塗別けだ、お祭の時には紅白の鏡餅、紅白の幔幕が必要じやないか、朝鮮人は平生赤飯吉日には白飯を炊いて祝ふが、日本は其反對で平素は白飯お祭日には赤飯だ、支那人は赤を慶事に用ひ、日本人は白を清淨神聖としとる、昔し私共が英文難句集研究中先生から、

『明日は赤字(レッドレターズ)である』

此レッドレターズの意味を質問されれ答辯に窮し赤い顏したが赤字(レッドレターズ)とは祭日の意なりと敎へられた事もあつた、還曆のお祝には赤い著物に赤い襦絆赤い帽子に赤い足袋でお祝するじやないか、赤が何だ!何が恐い?、私共の樣に子供半ダースに及ぶと左程珍重しないが子寶のない家に赤ん坊が生れたらソラ大變だ、夫婦の地位顚倒し嫁さんは鼻高々と赤ちやんにかぶせて朝寢、晝寢、早寢をきめ込み『アナタや……』等としなだれ、關白殿にお掃除から飯炊き洗濯迄仰せ附け、赤ちやんが頓だ滑稽劇をやらかす、赤が何だ!、私共は赤を恐怖する錯覺を笑ひたい。

奮鬪敬服

誰れでも最近ロシヤを訪問し感心するのは一路新ロシヤ建設の偉業に奮鬪する眞劍に充實する靑年の潑剌たる元氣と、峻烈なる檢非違使とも云ふべき國家保安部の透徹したる巧妙なる檢察振りと、國營各機關特に配給機關の整備が異彩を放つて居る點である、服裝の如きもロバーシカと名附くる亞米利加の兵隊シヤツ式の黑いシヤツ兼上衣に長靴である、是が新ロシヤの統一したる制服?、簡便無比な此ロバーシカが事務服、平常服兼大禮服だ、頗る要領を得、總てが徹底して居る、顧みると私共は日々繁雜極まりない生活をして居る、餘りに傳流に囚はれ因習に甚み自己自身負擔の加重に苦しみ之を亦子孫に引繼ぎつゝあるのだ、私共は先づ以て劈頭自己改善、周圍同化から始めにやならぬが餘程の大英斷を要し多數の共鳴者と呼應せにやならぬ、併し仲々夫れが六ヶ數から困つた者だ。

今春東都櫻花爛熳たる時、國民翹望の標的たりし普選も通過し財界の整理も著々として進み政界の革

『明日は赤字である』

此レッドレタースの意味を質問されし答辯に窮し赤い顔したが赤字との大英斷を要し多數の共鳴者と呼應せにやならぬ、併し仲々夫れが六ヶ數から困つた者だ。

商賣往來

十字路生

◎ちゞぶやの堀内さんがしばらくこの紙上に、姿を見せないのは、寂しい。

◎雜筆の一ッの特徴は、あの人の筆にあつたんだから……。

◎十一月號のお約束も、トウ〳〵水になつてしまつた。何んだか物足りなく思ふ。

◎靑々園茶舖のあるじ、昨年から富永式特許ストーブを賣出して、これは大當り、今年も十月早々から注文殺到とは、何ンテ素破らしい景氣だ。いづれ南山風光よろしきところ、雅味横溢の茶室でも出來ることだらう。

◎釘本樂器店の支配人、早大出身の話せる人である文藝方面の嗜好もふかいから、何か書くやうにと勸めて居る。

◎熊平商店で、金庫の月賦販賣をやつてゐるが、その廣告文は、近ごろの秀逸仲々よく書いてある。あの店のやることにソッはない

◎この頃は、どこからでも人參が出る。支那からも內地からも。だからウッカリ市中のものを買ふと、馬鹿を見る。電話で澤山だ。貴生堂で開城產のホン物を買ふことだ。

◎大發展をしたのは、山邑の『櫻正宗』だらう。京城支店を開いて、マダ一年とは經つまい。それが中流以上のお臺所に普及して居ること〳〵。隨分やつたものだな。

◎いよ〳〵ペーチカの需要期に這入つたが、今年も一番活躍するのは、宮崎ペーチカだらう。品の良いこと、キレイなこと、火力の强いこと、燃料を多く食はないこと、何んでも八大特色とかゞある。それに書齋用、客室用、お臺所用などとそれ〳〵その向きのものがある。鬼に金棒だな。

◎廣告を取りに行くと『どうも難有うございます』とペコンと頭をさげる京城名物早川堂看板店のあるじも、このごろは一寸面會することが出來ない。ナニ威張り出したのぢやない。商賣御繁昌で、うちに居ることが殆んどないのだ。ヤハリ正直の頭に神宿るか……人事ながらうれしいことである。

小閑雜筆

雜筆記者

◎近ごろ出た雜誌で、感心させられたのは、伊藤韓堂君の『朝鮮語』といふ月刊物である。

◎元來語學教授といふものは、乾燥無味に陷り易いものだが、この『朝鮮語』は、單なる讀物として——その日本語だけを、ひろい讀みしても、相當に面白いのである。流石に、伊藤君だと思ふ。

◎會話『朝鮮一週』などは、二三行讀んでる中に、とう〳〵しまいまで讀了させられた。朝鮮將棋の行方もよく書いてある。

◎藤波氏の『三十年前を回顧して』も面白さうだが、中村氏の『樂天窟とその時代』宋善洙氏の『京城語と平壤語』など、趣味に富んだ題材である。

◎私は、何よりもこの雜誌を成功させたいと思ふ。

◎この間、瀨戸病院長を訪ふと一人の紳士が、座に在つて、いろ〳〵の世間話をする。座を立たうと思ふが、次から次へ話が續出して、トウ〳〵二時間ばかり談じ込まれた。

◎あとで、名を問ふと、露崎黨氏……府廳の囑託であると。

◎近ごろ會つた人のなかで、これほど盛んに漫談をやつつける人は一寸見當らない。

◎文部省囑託細井肇氏（南米倉町）の處へ原稿賴みにやる。方々から矢鱈にいつて來るので、當分みんな斷つて居るとの返事……そこで、その儘返つたのかと訊くと『イエ、返らうと思ふと、細井さん、だが雜筆は外とは違ふから、君書くよ……といひました』

戀なき文藝

朴尙僖

◎思想を研究し發表する上に缺くべからざる文字として、世界に誇り得る程の複雜巧妙な諺文を有し乍ら、朝鮮固有の文學としては更に見るべきものがない。中古以來の技術として、當時の世界を驚かすに足る丈けの數々の古物が、今尙到る所に散見さるゝにも拘らず、之に正比例すべき朝鮮固有の思想としては一つも傳はつてゐない。世の人は、之を事大思想の結果だといふ。模倣文明の積弊だといふ。此等の中毒か、軈ては人間の尊い獨創力を殺す事は勿論であるが、然らば、原因は單にそれのみであつたか？私はそれよりも次ぎの如く言ひたい。即ち朝鮮には女あつて戀のなかつた爲であると

◎戀愛意識の進化發達が、あらゆる人間の創造力――殊に人文發達の先驅であるべき文藝の上に、どれ丈の貢獻を爲し來つたかは、今更喋々するの要もないであらう。淚くプラトンや、アナクレオン以來諸大家の著した書物は、汗牛充棟――寧ろ陳腐であるが、これを實際的例から見ても、ゲエテの『久遠の女性』やダンテの『神曲』の如き不朽の傑作がよく物語つてゐる。灼熱の高度を以て全生命力を燃燒しつつある戀の力が、軈てはそのまま藝術の方面に進化し展開することは、何も西洋文藝史の例を引くまでもない。貧弱ではあるが朝鮮の『秋風感別曲』や『春香傳』の如き詩歌小說を繙くも、作者の感情表現が如何に眞劍、如何に痛烈であるかを覺ふ事が出來る。而かもそれは、戀愛あつたればこそ傑作もあつたのだ。

◎日本人は、淚く紀記萬葉の如き古代の文獻に徵しても、また平安朝時代の文學に現はれた所より考へて見ても、本來もつと自由にもつと解放的に、兩性關係を見ることの出來た聰明な人々であつた即ち戀愛を正しく玩味し、讃美した詩歌――而も今日多く現はれる凡俗な短編文藝に於ては、見ることの出來ない不朽の詩歌――等をいろいろな方面より散見し得ることが先づ何よりの證據である。それが鎌倉時代ごろからの戰國殺伐の氣分と、儒佛の外來思想とを揑ねまぜて出來た武士道といふものに誤られ、戀愛思想に對する偏見が軈ては文藝發達の經路を妨げたとはいへ、矢張り日本人にその固有の素地だけは失はれなかつた。

◎所が、それが朝鮮になると、兩性關係の讃仰どころの騷ぎではない。先づ新羅、百濟、高句麗の三國時代から佛敎の禁慾主義なるものが極端に兩性關係への荒冷寂寞な觀念を與へた。斯くすること凡そ千幾百年、高麗の末世に至りこれと入り替つたのが支那の儒敎であつた。從つてこの支那よりの

【三二】

貿易品たる漢字系統の男女觀！、それは云ふまでもなく兩性の敬遠主義が專壽特許であり、一手專賣である。例の男女七歲にして何とかせずの流儀で、恰も日本の德川時代までの如く、當時から最近までの識者であり智識階級であつた漢學者等の兩性觀といふものは、如何にも馬鹿〳〵しいものであつた。儒佛以前に遡つての固有思想なるものは文獻に現はれてゐないその後の幾千年間は、外來思想が之を支配し左右した。固有思想のない所に、固有の文學はない……と私は言ひたい。

◎朝鮮の新しい人々が『人』として生くべく、人生の光りを虛僞に埋沒して顧みない漢學系統の舊思想に對し、强く反逆の旗幟を立て始めたのは今より約二十年前のことである、併し彼等は人生の詩であり花であるべき或るものを打ち忘れて、人間味の上に基礎を置かざる人生觀を夢みてゐた。砂上に建てられたる思想並に藝術革命の運動は、軈て破滅の日が來なければならない。即ち爾來十年を出でずして、靑春の戀を語る詩歌や小說等が、或は飜譯に或は創作に種々と現はれ、之を動機に新文藝復興の機運と方面が變つて來たのである、さりとはいへ、幾千年來の模倣的遺傳思想をば俄かに除去することが出來ない、これ即ち朝鮮の文藝は單に言葉を換へた日本文藝そのままであり、西洋文藝そのまゝである所以である、而も模倣は、他が盡きれば我も亦行詰まる、殊に文藝――そのものは、あらゆる淨化への先驅であらねばならぬ、私は、これ等の點より見て朝鮮文藝の今日は黎明期にあらずして革命期にあるといひたい。

御覽下さい

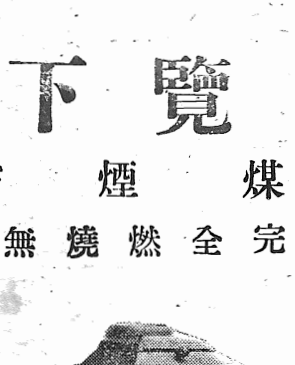
煤煙防止

完全燃燒無煙裝置

新許

發明の權威

石炭煉炭を焚いて完全燃燒し
絶對に無煙となる。
煙突掃除を要しませぬ



呈送錄型

京城龍山驛前

宮崎組本店

電話龍山八四二番

京城本町三丁目

京城販賣部

電話本局二八八九番

毎月煤煙防止無煙裝置の
實驗を御覽に供します

關することは、何も西洋文藝史の例を引くまでもない。看過ではあ

これと入り替つたのが支那の儒教であつた。從つてこの支那よりの

朝鮮文藝の今日は黎明期にあらずして革命期にあるといひたい。

市内明治町二丁目
中央婦人病院
院長 衣笠茂

市内明治町二丁目
内科 小兒科
中島病院
院長 中島貞信

市内明治町二ノ一〇五
榎本法律事務所
辯護士 榎本隆

市内永樂町二丁目
木戸齒科醫院
院長 木戸虎藏

市内本町二丁目
青々園茶舗
電話本局一一一一

市内旭丁二丁目
外科
皮膚科
瀬戸病院
院長 瀬戸潔

市内鐘路一丁目
濱洋服店
電話光化門二四四

秋から冬にかけて、人參を飲用すると、最もよく利くものだと昔から言ひつたへられて居ます、古人のいふことにウソありや否や、兎に角一度おためしのほど願上げます
京城本町二丁目
專賣局蔘槽
一手發賣元
貴生堂
電話本局一三八
振替京城七六一

高級
京染
（新柄見本到著）
京城本町三丁目
まらぎ屋
電本三〇六八
振京五八三

市内吉野町一丁目
内科
小兒科
木村醫院
電話本局七二五

向上靴

紳士向
學生向
女學生向
各種

向上靴は彼の有名な教化事業向上會舘産業部の製品で御座います、事業の性質から『正しき製作』と『正しき材料』とに依つて作られ、之に『正しき價格』を付して賣られて居ります、何卒御試用の上御批判を給はり度存じます

京城南大門通り

向上靴
一手販賣店
丁子屋洋服店

電話本局
長二四六
二二九
三〇九〇
番

休日なし毎日夜九時迄營業——御用の節は店内クツ部御呼出被下度候

れすら豫測する事も出來ぬ、一生の中の事でさへ左樣である、聖人

お俊傳兵衛

西本願寺布教師　大島智昌

『如何したら他力信仰の門に入ることが出來ますか』と云ふ御質問を私共になされる方が折々ありますが、外の教はいざ知らず絶對他力の信仰に進み入る第一の關門は、現實の自己を省察することである。この現實の自己とは外面の身體ではなく內面の我心である。即ち現實の我心を觀ることが肝要である。斯樣に申せば、皆樣方は古今の哲學者が命がけで觀察するのも、澤山な宗教家が頭を惱め心を碎くのも、皆我心でないか、斯る高尚な問題を、どうして吾々の樣な朝から晩まで店で立ち働く者に解決する事が出來やうかと申さるゝ方があるかも知れませぬけれども、是は心體と心相とを混同した話でありまして、心體は多くの學者達が見やうと苦しんだり、あせつたりして居ますが、心相を見るには研究もへちまも入りませぬ

例へば私の前の卓の上に一個のコップがありますが、今このコップの體性は何かと申せば、化學や物理學の研究を積んだ上で、何々の元素から出來上りて居ると云ふ事が明に解るだらうが、單に此コップの相は圓形透明なものであると直にわかります。何の研究も取調もいりませぬと同樣、過去の我心でもない現在の我心を省るのである、故に教育の多少に拘らず智識の有無によらず老若男女誰でも直に分る。どう分るか、價値のない事が分る。私は以前或市中の大道で猿芝居を觀た事がある、お俊傳兵衛の芝居であつた、其芝居最中に誰かゞ一片のカタパンを舞臺に投げた處が、お俊に扮裝した猿の奴さん肝心の芝居の本役を忘れてパンを取つて口にねじ込まうとすると、傳兵衛さんはお俊のパンを奪はふとする、お俊も取られまいと遂に喧嘩をおつ始めて、お芝居がオヂヤンになつた、私は思はずブツト吹き出すと、一緒に觀て居た友人が私の背中をポンとはたいて、何が可笑しいのか、吾人も彼の猿芝居と五十歩百歩だぞと云はれて私は考へた、成程吾等も今各社會の一員として一方の職を持つて務めて平生何事もないが、一度俄に利害問題が頭上に投げらるゝと、自分の地位も境遇も打忘れ義理も人情もあらばこそ、骨肉相喰むと云ふ鬪爭を始めるのである私共はいかに驕慢な者であつても現實の我自身を此のまゝに考へて見る時は、いかにも愚癡、無能、罪惡、生死の身であることに氣付くのである。諺に『一寸先は暗』と申しますが、何程古今東西に亘りて萬卷の書籍を讀破して宇內の形勢を論じても、私共は自分自身の運命がわからぬ、即ち自分の生命は何時まで延びるか、又一生の旅路が如何に展開してゆくか、それすら豫測する事も出來ぬ、一生の中の事でさへ左樣である、聖人孔子は『未だ生を知らず安んぞ死を知らんや』と申されたが、誠に私共の眞相を表はした言葉である私共は平常は自分の體軀を忘れて居るが、さて坂上に登らうとすると、胸が迫り呼吸は激しくなり體軀の重いのに氣付くと同樣、私共は相當重い罪惡を持つて居るけれども、惡を變め善を修めて向上せようとする道を知らぬ間は、其罪惡の重い事に氣が付かぬが、然るに一旦道の尊き事に氣がついて少し宛なりとも惡を去りて善に進みたい、非行を改めて德に向ひたいと思ひ立つてみると、始めて罪惡深重の身である事が明かに分つて參ります。即ち自分の理想が高くなればなる程、現實の自己の醜惡なることに驚かれます、世間では佛教の地獄極樂の話は、子供相手のお伽噺の如くに考へ居る人達が澤山ある樣ですが、私共は自己を凝視した時、自己一人の墮つべき地獄の實在を信ぜないわけにはゆきませぬ。されば地獄の實在は他人に問ふべき性質のものでなく理屈の上から論ずべきことではなく眞面目なる反省によりて我內心の奥底より自然に響き出づる叫聲であらねばならぬ。

◈三拍子の話

川尻非空

赤十字の佐々木さん、繪、書、詩といふ三つの道樂がある▲三拍子そろツて居るが、一ツも物にならぬと言はれるが、御熱心なだけ繪の方は、最近非常な御進境だといふ評判▲何しろ通信教授で勉强するといふ熱心さである。

演劇禮讃

植村病院長　植村俊二

一體演劇なるものはどうして始まつたか、其の起源に就ては斯道に頓と素人である私共には判らないが、何か變つた面白いものを觀たいと思ふ慾望と、他人の情熱的渦中に投じて其苦樂を頒ち、之によりて一種の興奮を得んとする好奇心とが其の因を爲してゐるといふ事は東西其の軌を一にしてゐるやうである。動物ならば口腹の慾を充たせば足るも、人間ではさうは行かない、日夜間斷なき劇務に鞅掌するものは概して官能を刺戟して興味を享けんことを渴望するものである。即ち娯樂、慰安といふ方面からでも演劇が自然の要求として生れ出でた理由は充分に認めることが出來る。併し私が茲に演劇を讃美する所以のものは單に娯樂として之を觀るのでなく、遙に重且つ大なる使命を帶びたる此の實社會に有要缺ぐ可らざる一の機關としてである。即ち演劇は民衆の娯樂場であると共に教場であらねばならぬ。劇場は社會萬般の狀態を上演し極めて通俗的に智育情育を授け、或る時は世の愚人に明鏡を與へ、其の千萬萬別の痴態を寫して之を罵倒し、或る時は因果應報の條理を明かにし、勸善懲惡の實を示し、人情の機微を穿ちて惡漢の邪曲なる心理を表現せしめ、又忠臣義士、節婦を拉し來りて櫛風沐雨、能く初心を貫徹せしめ、儒夫をして尙ほ起たしむるものがある。善を善として勸め、惡を惡として懲らし世上の正義を保護するは實に演劇の力である。正義も之を懲罰するに力及ばず默許せられたる幾千の罪惡は悉く演劇の懲罰權の及ぶ範圍と相並行し、法律を凌駕すとも謂ひ得る。

斯く私が演劇を讃仰する理由は或は時代後れの言といふ人もあらう、併し私は最初に御斷りした樣に元とより斯の道の素人で、劇が文學であるか、藝術であるか、將た『藝』であるか、夫れは知らない。只此頃曾我廼家宗五郎が邦樂座の樂屋で讀賣記者に向て吐ける氣焰の中に『でも私のなんぞ（自作の脚本の事）興味本位に妥協したもので藝術じやなくつて藝と思ひます。お恥かしい次第で。でも私達はせめて緣もゆかりもない他人樣が態々お金を出して逢ひに來て下さつたお禮には一晩遊んで行つて戴くのを使命だと思ひます』といふ言葉を味へば名人の用意疎かならぬ所を知ることが出來る五郎君を引合に出したからには序に喜劇をも大に讃美したいと思ふ演劇の功績に就ては喜劇必ずしも悲劇の下にあるものでない。諷刺は時として面責よりも人の肺腑に徹するものである。之は吾々の日常生活にも良くあることで、己が非行を誠心誠意忠告してくれる苦言に對して反感を抱く者でも、間接に與へられたる輕快な諷諭には反抗の力もなく、甘んじて其制裁を受くる樣になる、要するに喜劇は人の弱點を發き、直接に其愚を罵倒せずして觀客各箇に其醜行を自覺せしむる所に教訓がある。

考ふれば演劇の道義的教化は實に偉大なるものである、觀客の教育程度が低級であればあるほど一層然りである。無教育の人民は只演劇を通じてのみ祖國歷史の一端を窺ひ、人情風俗の變遷を知ることが出來る。彼等の腦裡に印する英雄は皆劇場に活躍せる人物のみである。又同一人物にても只劇に現はれたる部分以外全く前後の傳記は彼等の知る所でない。例へば義經の如き鵯越の義經を知らぬ者はあつても、勸進帳の義經を知らぬ者はあるまい。之は日本人の歷史的觀念が義經失意の末路に對して非常な同情を有つてゐたせいでもあらうが、歌舞伎十八番のお蔭による事は論を待たない、私は此意味に於て吾が日本の國民的特徴を加味せられ之を潤色するに矢張內國的材料を以てせる戲曲が續々上演せられん事を希望する。如何に立派なる藝術であらうとも風教に益なきものは吾々觀客には無くもがなである。されば創作誠に結構ではあるが、昨今のやうに淺薄なる材料では却て觀る方が赤面する。譬ひ其思想は五十年、百年後れて居ても依然として歌舞伎狂言の世界であつてほしい。

さるにても之に扮する俳優は果して斯かる高尙なる天職を自覺して業に從事してゐるか。社會の待遇が高まれば高まるほど其品性が向上しつゝあるであらうか。昔は錦を着たる壘の上の乞食と謂はれ一代の名優にして高情雅懷當時に盛名を馳せし白猿さへも『お素人家に生れし故、歳にも恥ぢず女の眞似するは如何なる因果ぞと頻り地歩と待遇とに對し地下の白猿をして過當なりと謙讓せしむる憂な

第一印象

本町しらぎや京染店
安達清太郎

私の友人にi君といふのがある。年は若いが仲々よく出來た人物である。商賣は△△であるが、店も可なり繁昌して居る。

一昨年のくれのことである、このi君が嫁さがしを始め、私にも何分頼むといふ話である。そこで私は、大に義俠心のやうなものを起し、心あたりをあれか、これかと奔走したものだ。一體私は、結婚の方では失敗者なので、その穴うめといふ譯でもないが、i君だけにはいゝ嫁を周旋し、立派な結婚成功者になつてもらいたいといふ一念からそれは可なりな力瘤を入れたものだ。

或る日途上で、これも友人のK君のお母さんに遇つた。そこで『おばさん斯々の次第だが、いゝ候補者は……』といふと、一寸考へた母堂ぽんと手をうつて『ありますね、丁度いゝのが、あの××さんのお妹！、これなら申分はありますまい』一體このK君のお母さんといふ人、なかゝどの天才といふか、花嫁鑑定の大家といふか、こんな話にかけては、不思議な取持力を有つてる人である。

で、このお母さんも仲に這入つて貰ひ、日を定めて京劇で見合ひをしたといふワケです。で、花婿に向つて『第一印象はドウだね』と訊くと、一言『いゝネ』といひます。ことばは簡ですが、愉悦は滿面にあふれて居ます。で、私はこれは成り立つなと、先づ確信をもちました。それから女の側を訊いて見ると、これは『どうかよろしきやうに』といふのです。かうなるとトン〳〵調子。年内に話が運び。正月にはもう新郎新婦うちつれて拙宅を訪うて、大にむつまじいところを見せるといふワケです。

この結婚は成功し、今では歩く位の赤ちやんさへ出來、家運いよいよ隆昌の有樣です。

一代の名優にして高情雅懷當時に盛名を馳せし白猿さへも『お素人樣ならば悴へ家業を讓り隱居をもすべき歳なり然るに賤しき役者の家に生れし故、歳にも耻ぢず女の眞似するは如何なる因果ぞと頻りに落涙いたし候』と述懐せし程である。今日社會より受くる俳優の地歩と待遇とに對し地下の白猿を

常生活にも良くあることで、己が非行を誠心誠意忠告してくれる苦向上しつゝあるであらうか。昔は錦を着たる壘の上の乞食と謂はれ

め、又忠臣義士、節婦を拉し來りて櫛風沐雨、能く初心を貫徹せし

話は唯だこれ切りですが、私は常に、この第一印象といふものを大切に思ひます、それは理屈でなく、説明でなく、註釋でなく、いはゞ一種の靈感です。しかもその靈感は、確實に人事の或る場面を最終まで支配しますから面白いんです。花嫁と花聟とが、ほんの一瞬！眼を見合せます。そして双互に『いゝネ』と思つたら、先づその結婚は生涯的に成功です。そして私は亦京劇の見合の瞬間、双方の容子を一瞥して、第三者の第一印象として、これは成立つなと思ひましたが、矢張りそれはその通りになつたのです。

（十四年十月十二日稿）

鎭座祭恭賦

萬歳書閣主人　古城梅溪

朝鮮神宮鎭座祭恭賦

桑槿本同根、合邦歸一元。崇宮懸日月。明鏡照乾坤。
八道風塵絶。千秋雨露繁。雲垂彫玉葉。門樹鏤金旛。
漢水蒼龍躍。南山皓鶴翻。仰瞻輪奐壯。拜舞頌天恩。

寄東上委員渡邊無外老臺

欲爲邦家警醉醒。風塵奔走日無寧。洛陽城裡稱多士。
相遇何人眼最青。

送大垣金陵東上

俠骨稜々意氣多。老來勵起唱悲歌。征車遠入都門日。
不識風雲果奈何。

寄東上委員大村紀山盟兄

空資爭得靖民心。說到厚生情不禁。囊裡何妨新句乏。
盛來恩露潤鷄林

都市の美化

專賣局　高武公美

一

日本內地や朝鮮の都市は今少し奇麗にならぬものであらうかと私は常に思ひます。町が概して狹隘で、曲りくねつてゐて、しかも普通は舗道になつてゐないし、建物は貧弱であるし、その上町の不潔なことは驚く計りで、紙屑とか木切れとかが一ぱい散らばつてゐます。商家の看板なども徒らに大きくて品の無いのが多いし、塵箱が表通り出しやばつてるのすら難有くないのに、その箱が破損してゐて中味が暴露されてるのが隨分多いと來てるからたまらない。其の外市街の目貫の部分に當つてる所に倉庫があつたり、又は薪炭屋とか材木屋とかがあつて、町並に薪炭を積上げたり、街路の方へ古朽い材木などを突出して並べたりしてるのなどは、誠に見つともない限りで都市の美觀を傷くること夥しい。要言すれば都市は先づ第一に設計がよくなくてはならぬし、次にはそれが常に奇麗にされてなくてはなりません。京城なども近頃は追々立派な建物が殖えて來て美觀を增しつゝあるけれども、まだ理想に達せざること甚だしい。

二

私は前から市街美のことを考へてゐましたが、歐米各國を一周し奇麗な諸都市を實際目擊して來てから一層此感を强ふしたのであります。

歐米の第二、三流國の諸都市ですら內地や朝鮮のに比較したら大きさの問題は姑く別として部分々々の美は遙かに優れてゐます。況んや第一等國の大都市に至つては規模の雄大なる點に於て、市區の整然たる點に於て數等上位に在ることは謂ふ迄もありません。例へば巴里の凱旋門邊りから有名なるシャンゼリゼーの大通りを通してコンコードの廣場やルーヴル博物館あたりを眺める時の感じや、伯林のウンター、デン、リンデンあたりの一帶を眺めた時の感じなどは全く以て何と云つたらいゝでしよう。市街美も玆に至つては實にその極致に達したもので、夢の國か想像の世界でも逍遙してる樣な氣持が致します。而し此等は巴里や伯林の中でも最も優れた場所で世界でも一二を爭ふ町でありますが、その他の相當な都會の町でも設計がよくて且市街美を充分發揮してゐるのであります。

三

理想的な都市を建設するのには莫大な金を要するので、都市の問題が出ると二口目には我國には金が無いからと云ひます。尤もな話で今の所ではまだ內地でも朝鮮でも理想的な都市を造る丈の金はありません。而し金があつたら出來るかと云ふのに必ずしもそうでない。先づ市民に自己の居住せる都市を美しくしようと云ふ熱烈なる愛市心の橫溢することが必要であり、今一つには都市計畫の頭腦を持つたものがなくては出來ないことであります。巴里とか伯林とかその他の大都市には隨分金がかゝつてるでしよう。けれども之と同時に餘程緻密な頭と雄大なる計畫力とを備へた人があつて、しかも可なり長い年月に亘つて、成し遂げられた仕事に相違ありません。若し內地や朝鮮の諸都市にして都市計畫を根本的に立て直して進まうと云ふ考へが無いならば、時の流に從つて幾分の改善は見得るとするも、根本的改善は恐らく何百年を經過しても出來る世話はあるまいと思はれます。

依て眞に都市の面目を改めんとするには、都市計畫の任に當る者が先づ第一に基礎的の計畫を定め置き、都市に負擔力が出來るに從つて豫定の計畫に從ひ少しづつでも改善するか又は火災等に依つて現在の市街や建物などが大に破壞される樣なことでもあつた時には其部分からでも著手して改善して行く外は無いでしよう。

四

都市計畫のことはなか〳〵大きな問題で前述の通り之には優れたる計畫の能力と巨額の資金とを要し直ぐに實現することは困難であります。それで大體の計畫を定めて置いて徐々に改善の歩を進むることとし、又一面建築に關する法令を定めて火災豫防や美觀保持の見地から建築物に一定の制限を加ふることなども必要であらうと信じます。

次には現在の儘の都市でもいゝ保つ方法を講ずるの要あると同時に、各個人が家屋を建築するに際しても其の方角や體裁にも考慮を

て一方に於て法の行使の出來ぬものが他の一方に向つてそれが出來るといふのはそれは法は萬

私は前から市街美のことを考へてゐましたが、歐米各國を一周しが無いからと云ひます。尤もな話で今の所ではまだ内地でも朝鮮で令を定めて火災豫防や美觀保持の見地から建築物に一定の制限を加

ふることなども必要であらうと信じます。

次には現在の儘の都市でもいゝから今少し都市を奇麗にしようと努むるの必要があります。市や府の如き公共團體がその費用を負擔して稍々組織的に市街地の清潔を保つ方法を講ずるの要あると同時に、各個人が家屋を建築するに際しても其の方角や體裁にも考慮を費し、且少くとも自分の家の周圍丈でも日常奇麗にして町の美觀と品位とを保持して行くことにしたいものです。

非常線（中）

佛教慈濟會　小水眞二

B　君のいふ通り大に怪しからん（一寸と考へて）が然しだね、世の中はどうしたつて長いものにやまかれるよ、結局其方が世渡りをするのに都合がよいのだ若し其時何をいふか馬鹿野郎とでもいつて檢事の頭でもなぐつてでも見給へ、早速翌日は糧道にひゞが這入るよ、それよりか御役目御苦勞といつた時に閣下と知らずに御無禮をいたしましたとでもいつて直立不動で敬禮の一つも餘計にして見給へ、それが上から上へと傳はつてまア昇給が早くなるわけじや、君の考へるように世の中はいかぬよ

C　馬鹿！夫ぢや君は自分の職務がつとまりかねても長いものにや無理を通さしてやるといふのか、それで吾々は民衆の爲に働くんだといふ事が何處を押すと出るのだ。

A　マア〳〵そんなにいふな、君のような頑固一徹じや通らんよ

C　何といふ臆甲斐ない奴だ。

B　エヘウ大きく出たね。

A　いや實際非常警戒の時にこんな事があると困るな（Bに向つて）そんな時にや君やどうする

B　其時かい其時は臨機應變、不得要領にするに限ぎる。

A　不得要領といふと……。

B　いや不得要領で置いてこちらの方が要領を得て置く丈さ。

A　仲々むづかしいな。

C　何がむづかしいかい、昇給か賞與位のところに要領を得て置くのだよ。

B（Cに向つて）君や口が悪いよ

C（Bに向つて）何そうじゃないか君のような人間は月給さへ上れば上官の嬶の腰卷でも洗ひかねまじき人間だ、目的の爲めにや手段を選ばずといふ代物だからとても問題にやならぬ。

B　酷い事をいふない、言ふに事欠いで何んぼ俺だつて自分の嬶の腰卷なら我慢もするが何んぼ上官だつて其嬶の腰卷までは。

C　要するに君といふ人間は自分より上の者に對しちや完全に法の行使は出來ぬだらう、何故つて一方に於て法の行使の出來ぬものが他の一方に向つてそれが出來るといふのはそれは法は萬人に平等だといふ事を解せぬ輩のいふ事だ、世の中に何が危險だといつたて法の活用を知らぬ者に法を行使せしむる程危險な事はないのだ。

俺が京都に居た時分の事だつたがこんな事を聞いたよ一つ話して見る、又それが君等の參考になるかも知れんから。

それはな京都の烏丸四條の電車の交叉點といつたら大した交通の頻繁なところだ、京城の黃金町や鍾路の交叉點位じやない、其處に名を忘れたが交通係の男が居たが自分に與へられた法の威權を何處迄も保つて彼の眼中には上下の差別はなかつた、そんな所で事故ひとつ起さずによく民衆を指導したといふ事はつまり法を完全に活用して居たからだよそれについて……。

◇江湖風聞帳

吉用莊一

◎遞信局の堂本事務官、局中隨一の逸足として名高い。外語の出身である。年齒三十六七、文章を書かせても、演說をやらせても、それは水際立つたものだといふ。

◎赤木京城師範、會つてまことに心持のいゝ人『では、金剛山遊記でも書きませう』といふ。處がこの人校務には頗る懇心、且つ細密部下の先生等は、毎日おつかなビツクリ、『あゝ困つた……赤校長に一本やられる』とよく悲觀して居る。アレで、存外こまかい處のある人らしい。

戻り路

廣田康

○

私はまたしても例の散歩の戻りみちで勝手な想像にかきくれる、佳人をのせた馬車が闇の中へと轢り去ると同時に私の想像も亦曖昧とした淡い未來の果てへと驅ける、佳人と讃へられた人々もだん〳〵と年の坂を下りゆくありさまを思ひ浮べずには居られないのである。例に依つて例の町筋を私は散歩しながら、佳人の過ぐるに遭つては彼女の容色の美に崇敬を拂ふのはお定まりの私の癖である。私の服の肘は縞目があらはに其の膝は光つて居る、如何にも奇妙な裝ひではある、然し乍ら萬が一彼女が窈窕たる妙齡の時期に當つて之を以て人生また老義あり苦難あり將又貧窮あるの事實に想到せしめ得る樣なことがあるとしたなら路上一瞬の遇會と雖も自他を益すること蓋し尠少ならずと見ねばなるまい、げに嬋妍花の如き佳人と雖も打ち寄する老の波をば免れることが出來ず、もう招待の宴席べも列することが無くなり獨りもの靜かに自宅でそれを濟ます樣な時期が遠からず來る筈である。勿論この私の如きもその頃にはもう既に亡き數に入るであらう。けれども例の白いネクタイをつけた他の老書生が私の趣味を繼承して五月の夕べには私が昔見て樂んだ光景に憧憬れてこのあたりを逍遙するに違ひない事と信ずる。然し何もかも過ぎ去つた昔となる、私の趣味の後繼者に至つては馬車の中の老婦人に目を注ぐ樣なことはよもあるまい、彼等の崇拜は今や去つて新時代の佳人の上にある、その昔佳人と唄はれた老婦人の指には數々のダイヤやら綠玉は燦めいては居ない、其の條太い指には婚約の折の眞珠の指輪が一つ淋しそうに光つて居るのみである、其の手を執つて食卓へと誘ふのは眞面目くさつた顏の老牧師さん位が關の山、長椅子に腰を下ろして居る老婦人を見て新時代の若紳士の面々がその昔の面影を想ひ起して呉れるや否や、自分達の祖母曾祖母の華やかな時代はもう何年前であつたらう、五十年六十年前の春は回へすよすがもない、おばあさまと云へば頭巾と黑の裝ひとを聯想させることに決まつて居る、クレオパトラとかスコットランドのメリー女皇とかいへば淡い――過去の人であつても永へに若く艶やかな樣にも感じられるが各々方のおばあ樣ではそうはいかないのである、花恥しい當代の麗人でも何れはそれ〳〵のお婆樣と同じ憂目を見ようといふものだ

○

凡てはみんなこんな具合に移りゆくは必然である、けれども之を觀てこそ麗人の艶やかな笑顏に單なる哀愁を漂はすことなく寧ろ却つて一種靈妙なる優美さを加へんことの望まるゝ次第である、宛も咲き匂ふ五月の花輪に一穗の尾花を添ふるが如きものである、これ決して饗宴の卓上に髑髏を置くの類ではない、寧ろ若きマドンナの面上に見る無限の憂恨である。

げに歳月の過ぐること夏雲の如く昨の幼女は今の人妻であり母性である、寔に眼中之人吾老矣、私も老い妻も老いた、そのかみの我等が青春の日の色香をば何處にか求めんと欲するものゝ如く物悲しげにやさしき妻の視線の我が面に注がるゝこともある、そうした容色の如きはも早や何處にも尋ね得べくもないことありし昔の春の野邊に彼女がかざした一枝の花の樣なものである。だが彼女のつぶらかな眸からは次第に珠玉の如き涙を催して來る、是れは萎え果てた容色を嘆く悲しみの涙ではない胸底深く滅却し得べからざる無瑕の光明を認め得た歡喜の涙である。

○

九月號所載の拙稿散歩の續稿です、從てこの中の『私』に就ては前に御斷りして置いた通りと御承知願ひます、尤もほんとうの私も時々散歩はする、一日以上の樣な文章を讀んだことのある一昔を想ひ出し、獨り微笑の禁じ得なかつたと同時にアメリカにもこんなことを書く人も居たことを面白く感じた。

（一四、十〇、一四日）

忘れ得ぬ野球戰

西本量一

大正九年五月、彌生丘の一高校庭で行はれた慶應對一高の野球試合ほど私に取つて印象の深い、いつまでも忘れることの出來ない試合はありません。今でも思い出すと全身の血が躍動するのを覺えます。其の前の年には三田のグランドでやりましたが其の時には一高稀代の名左投手内村の爲めに慶應軍は全く封じられてしまつて、當時日本一の名を擅にして小學兒童にまで其名を謳はれた三宅（二壘）森秀（投手）松田（一壘）森茂（遊撃）鍜治（中堅）腰元（三壘）の面々を以つて固めた三田軍も遂に二壘を踏みしものなく、十七箇の三振を喰つて慘敗しました。無遠慮な向陵軍は凱歌を揚げて引上げ三田勢は茫然として之れを見送る外なかつたのであります。其の年の秋、松田、平井は相前後して他界しました、松田が澁谷赤十字病院で自ら死を悟り、枕頭に待した同僚と別れの握手を交はした時、最後に遺した言葉は『來年は必ず一高に勝つて呉れ』の一言でありました。愈々息を引取る時、戰友達は死に行く彼れに彼の最も愛好せるボールを握らせました。彼は此の時死神の手を振り切つてムツクと起き上り、握らせられたボールを空に投げつけ其の儘息を引取つたのであります。

◇　◇

今日はその弔ひの會戰です。慶應は五千の應援團を組織し、いたいけない幼稚舍の兒童から大學部の學生に到るまで、紫の小旗の波を作つて三田の山を下り、札の辻から借り切りの電車數十臺に打ち乘つて、旗皷堂々として本郷さして繰込んだのであります。銀座、日本橋を經て愈々一高勢力圏内の本郷に差掛るや、既に殺氣滿々たるものがありました。球場はと見れば萬朶の櫻は既に散り失せて、一壘側のスタンドには白條の向陵勢が例の南無根津大權現の大旆を始め、大旒小旒幾白條が翩翻として春風に翻り、陰々たる太鼓の響が場を壓してゐるのであります。一方三壘側に陣取つた三田勢は寂として聲を發する者なく鳴を鎭めて時の到るを待つたのであります。

◇　◇

レディー！數萬の觀衆の筋肉は緊張した。プレイボールは宣せられた。昨年の恨みを晴すかそれとも返り打になるか、選手も應援團も心を一にして試合は異常の緊張裡に進められて行きました。一回二回、兩軍共得點はない。よく守りよく防ぐ。四回、五回、六回と重ねても緊張の度を增すばかりで更に得點はない。流石の根津權現も息を殺して見守り給ふのみ。風もなく長旒も垂れ、萬相悉く一投一打に魂を奪はれ、勝負如何にと片唾を飲んでゐるのであります。七回も遂に無爲。八回。慶軍新田の打つた球が二壘の頭上をかすめたので、中堅手之れを攫まんと前走した時、球には如何なる靈の魅入りしにや、カーブを描いて舞ひ上り、進み出た中堅の頭上高く越へ其の後ろに落ちました。其の間に二壘に居た走者長岡は長驅砂煙りを蹴つて本壘を衝いたのであります。貴重なる一點。試合は一對零で慶應の勝利となり、三壘側の紫の旗は亂舞して暫し己むことを知らなかつたのであります。一壘側の大鼓は又陰々と哀れに鳴り響いて居ります。慶軍は其の儘青山墓地に詣で、松田の墓前に戰勝を報告したことは申すまでもありません其の夜銀座のカフエー、ビヤホールは悉くペンの徽章に獨占されて夜更くるまで飲み且つ歌つたのであります。思ひ出せば今でも血が湧いて當時の光景があり〳〵と私の眼の前に浮ぶのであります。

本ブラ漫記

笠原ふみを

或日の富田儀作翁

【四四】

東京の銀ブラに凝らへて、本町をブラックことを、本ブラと云つてゐる。鍾路通りをブラックと鍾ブラ、黄金町をブラックと黄ブラつてことになる。こうブラばかり流行ると、もう鼻先にブラ下つてるやうで、何だか五月蠅くなつてくる。流行が時代相を物語ると云ふが成程ね、近頃の樣にブラ〳〵してゐる人間が多くなると、無賴の徒も多くなる譯だ。と云つてアブラを賣りたくつて……の結果でもないが、不景氣になると此の種の徒が多くなる。ブラックニストがそれだ。

日本ばかりでなく外國でもそうだ。女權が擴張されて、男女間の自由戀愛と云ふのなんぞ、六十面を下げてもラブラブと叫んでゐる丈も外國だから云ひ方も反對だがね、日本で之を高唱して、輕井澤の別莊の梁にブラ下つた文士もある。

何れにしてもブラと云ふ流行語は感心できない代物だ。

所でこのブラを決め込んで、ブラなるものゝ本體を探つて見やうと云ふのが、今これから試みやうとする本ブラ漫記である。

チットは漫畫家の漫文も讀んで見て下さいな。

京城郵便局前の廣場、それは陸上の港とでも云はうか。鍾路、南大門、本町通りから來る人間の多くが、此の港に吐き出される。そして此の港にも滿潮の時刻はある

夕闇を衝いて流れて來る多くの人間。それは餘りに目まぐるしい人生の、安價な安息所を求める人の子の群である。

輕い財布に帆を掛けて私も本ブラと、と瀟洒なところを見せる。

本町通りの入口に立つ警官に、淡い同情と敬意を表して柄でもない紳士を氣取つてブラック。唐の丞相なら車上で鞭うつところだ。だが、そうもして歩けない。此の狹い三間道路を、自轉車が走る、荷車が通る、人力車が馳ける。男女、老人、子供、馬、犬、猫、豚とも云はぬが、ても賑々しいことではある。

番頭の御丁寧極まる打水に、現代タイプの若い女のフェルトが踊る。コンクリートの道路に、咬み付くやうな音を立てる學生の朴齒下駄、夢遊病者の足どりのやうに目的や望みの音も立てぬ、鮮人のゴム靴。だがこうした雜多な音の交錯にも、パンを求める音、戀を追ふ音、享樂を求める音、病苦を遁れる音のあることを知る。之が人體最下端部の出來事である。之を私は聲音哲學と呼ぶ。

と云ってこんな音を一々聞き分けて歩いた日にや、少しセンチメンタルな人間は急性神經衰弱に罹

つて、永い眠りと云ふと體裁がいゝが固くなつて、つッ張つて、硬

怒號を浴びる度に紳士の

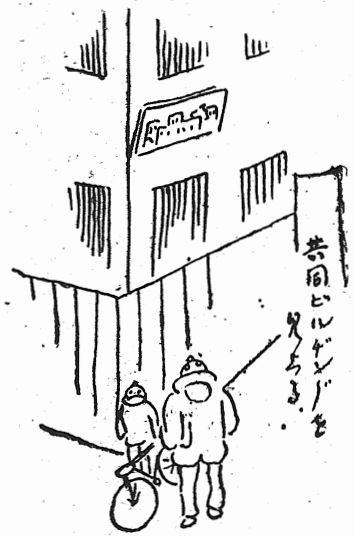
京城雜筆

つて、永い眠りと云ふと體裁がいゝが固くなつて、つッ張つて、硬張ばるでせうよ。ブラも此處で深刻味を加へると、そろ〳〵危險になつて來る。

でも內地の都市に比較したら、還晉哲學の刺戟は遙に小さいだらう。所謂牛歩で普通に云へば人間が大陸的なんだね、よく云へば幸福そうな人間が多いのだ。が惡く云つたらノロマなんだらふよ。もつともブラック塲合だから合理的だ。

本町通りに少し入ると左側に共同ビルが建つてゐる。まだ工事中ではあるが……。殊に結構な建物だとしばし悅に入る。郵便局に面した角に鳥瞰圖が色彩されて掛かつてゐるが、このビルの附近らしい。何處かの番頭君の批評『之は實物より立派だなあ』其の通りと私も感銘した一人である。

このビルのはづれに來掛かると飯泉シャツ店との間の露路から怒號が洩れる。鮮人先生が二三人煉瓦を積みながら『オイ……コラ！』を連發してゐるのだつた。だがそれが何人の爲か勿論知るよしもない。路傍に一人紳士が立つてゐるのみだ。難解の謎である。がナールホドと感慨無量、一寸皆さん聞いて下さいよ。本ブラの裏面史を紹介しますから。



怒號を浴びる度に紳士の顏面筋肉はピクリと動く。それも道理と云へる。一間程離れた地點には、まだうら若い新妻がしやがんでゐる。裾は後に煽られて地に付いてゐるがほの白い膝頭は現はに見える。何んとお察しになれますかな。之は飛んだ御無禮と早速引返し、幽かな苦笑を浮べて逃げ出す。

此所でヒョット三中井吳服店のショーウインドウに目を引かれ、覗いて見る。店內は相不變婦人客で滿員。勿論買ひ手は三割と見れば間違いないだらうと勝手な判斷を下す、此の店の主人、疊道樂かどうか知らないが、店の疊一疊三十圓とか、勿體ない事だといらぬ心配もして見る。

安田銀行支店前に來ると、チョンガ連の花賣が關所を作つて居る菊が三本四十錢などゝ大きな事を云ふ、迚も私には買へない。せめて最愛の妻でもある者なら『歸つて之を妻に與ふ。何ぞ仁なるや』と云ふ氣になるが、チョンガーの身ではそれも適はぬことといつそ買はずに歸へろふと定まつてゐることを決めてしまふ。此の邊は實に骨の折れるところだ

心配したり遠慮したり、考へ込んだりこんな本ブラを續けたら、ブラ〳〵どころか頭がヅキ〳〵して來る。もうそろ〳〵皆さん廻れ右！してもいゝ時刻でせう。

◈東京たより

東京　丸山生

松本さん

今日の神嘗祭、東京地方は大嵐でした。朝五時大雨を衝いて出發千葉縣四街道の大平野で行はれた青年團總動員に列して千葉縣下二萬五千の青年に激勵の言葉を述べて全身ずぶぬれになつて只今歸宅いたしました、そして御端書を拜見いたしました、一層御懷かしさを感じます。日本青年館の開館式の準備などで忙がしさのあまりついて御願することを忘れて居たことをそれで思ひ出しました我が機關雜誌青年を十一月號から方針を變更して全國壹萬五千の青年團に如實に讀ませる雜誌に致しました。それにあのなつかしい『秋日雜記』を『朝鮮の秋愁』と改題して轉載させて頂きます、御許かないのに締切の間に逢はないので私が筆寫して編輯に渡しました、御咎めのないように御願ひ申上げます。

【四五】

の別莊の梁にブラ下つた文士もある。

來る多くの人間。それ

京城雜筆

臥雲臺の秋

……鵲巣居訪問の記……

中島司

一

秋風吹いて黄塵々、南山の野菊今を盛りと咲き匂ふ。借問す臥雲臺鵲巣居の秋やいかにと。

『野菊を見るに就ても、想ひ出すは朝鮮の秋だ。予は今頃の朝鮮が戀しくてたまらない。朝鮮の十月は、何とも形容の出來ぬ季節だ氣候のみでなく、森羅萬象が殆ど美化せらるゝ趣がある』（蘇峯雜筆）

大正十一年十月十一日湘南野史亭にて、德富蘇峰先生が、庭上の野菊に對して朝鮮の秋を偲び述懷せられたるが右の一節だ。久しく朝鮮と遠ざかつて居られる先生は秋ごとに朝鮮を思つて居られるであらう。此の秋も定めし思ひを朝鮮に走せ居られる事であらう。

二

蘇峰先生が相洋の濱にて、朝鮮の秋に戀著の情を泉筆に叙せられし三年後の大正十四年十月十一日は恰かも日曜に當つたので、私は久方振りに鵲巣居を訪うた。鵲巣居とは知る人ぞ知る、蘇峰先生の京城に於ける別莊だ。別莊と云ふ文字が贅澤に聞えるならば、敢て幽居と云ひたい。然り之を幽居と云ふが最も適當である。京城の北陬、白岳と仁王山との峰脈の相接する所に彰義門がある。所謂北門だ。門内一帶はもとの白雲洞、今は清雲洞と呼ぶ。鵲巣居は北門より二三町手前の道路に沿うた所。園圃あり溪流あり、天然の風趣眞に掬すべく、然かも人居としては至極簡素な溫突式住居だ。

三

當日は天氣晴朗、絶好の散歩日和であつた。豫じめ家兒三人を伴う積りだつたが、二兒已むなき故障あり、六歳の三男を携へて南山麓の草舍を立ち出でしは午後一時であつた。鮮銀前で乘つた電車を景福宮横迎秋門で下り、取り攫げ工事中の道路を清雲洞へと徒歩した。此の道路、今に出來上らば、電車は神武門邊まで延長されるであらう。京城市街の發展は今や北門近くまで及びつゝある。實に今昔の感に堪えない。

四

さすがに臥雲臺鵲巣居の林泉の風趣は昔ながらであつた。門を潛りて直ちに眼に映ずしは、石墻一面に纏はれる蔦の血よりも紅ひに燃え立つその美しい色彩であつた邸内に樹多し、槻や櫟や楢や楓やそれらは未だ綠葉の儘であつたが櫻葉はすでに三分通り黄ばむで居た。數株の柿の木も枝も撓わに黄實をつけて居た。栗の實は拾ふ人もなく地に落ちて居た。菜圃には大根が黑土から拔け出して居た。ダリヤの咲いて居る邊りに鷄が喧々として餌をあさつて居た。溪畔には野菊が——蘇峯先生の大好きな野菊が亂れ咲いて居た。コスモスも秋風の中に頻りに點頭して居た。幽深な小溪の巖石は一面に苔蒸し古色蒼然たるものがあつた。

まことに臥雲臺の秋は、松聲、澗聲、禽聲、虫聲、すべて昔も今も變りはなかつた。たゞ先生の不在が如何にも殘念であり、物足りなかつた。私は留守居の高山君夫妻が御馳走の燒栗をたべながら、在昔京城日報時代の思ひ出でを語り合うて、夕日が仁王山に沒せんとするまで、徘徊顧望して、歸るを忘れた。

五

鵲巣居の園林は、年を經て一層の詩趣を加へた。然るに、幸か不幸か、京城の所謂文化が、所もあらうに此の北門の邊りにまで及んで來た。蘇峯先生の幽居は今や幽居でなくなりつゝある。何となれば、鵲巣居の門前數歩の所には、物々しい地ならし工事が行はれ、夥だしい切石や煉瓦が馬力で運ばれつゝある。道立商業學校が此處に建てられるのださうな。そればかりではない。何時の間にか清雲洞に赤瓦灰壁の普通學校の二階建てが出來て居たのに私は驚ろいたそれは素より結構な事である。が併し、蘇峯先生の所謂京城の小桃源が、今は塵境と化しつゝあるのは爭へない事實だ。斯くては先生も最早や退一歩の工風せられて、北門外にでも引つ越されない限りは、閑境に安居を有せられることも出來なくなりはせぬかと、私はひそかに心配しながら、鵲巣居を

『本日は東京でも全くの秋晴也

る。

おぼえ帖

幽居と云ひたい。然り之を幽居と云ふが最も適當である。京城の北陬、白岳と仁王山との峰脈の相接

京城雜筆

も出來なくなりはせぬかと、私はひそかに心配しながら、鵲巢居を辭したのであつた。

六

さりながら今日の鵲巢居が決して俗境と化したと云ふのではない秋風靄靄として木葉雨と下る臥雲臺は、清閑を樂しむの人にとりては洵に嬉しい詩境だ。私は江湖の雅客に鵲巢居一遊を勸めたい。

七

記して茲まで到つた時、料らずも蘇峰先生の手翰に接した。それは十一日鵲巢居を訪うて、其の夜先生へ宛て報告した私の手紙に對する返書であつた。十五日附である。

『本日は東京でも全くの秋晴也來客ありて四五通の郵書を懷中にし大森停車場にて車の來るを待つ間に先づ貴書を拜見仕り候餘りに興が湧いたから車中にて又一度出社の上又一度都合三度拜見候』

と書かれてあつた。

『返す返すも朝鮮の秋が戀しく御座候』ともあつた。

『六歳の坊ちやんによろしく』ともあつた。私の拙文すらも蘇峯先生の朝鮮秋懷を唆るだけの効果があつた事から推しても、如何に先生が鵲巢居の秋を戀しく思つて居られるかが知られるであらう。

（大正十四年十月十八日記）

それらは未だ綠葉の儘であつたが櫻葉はすでに三分通り黃ばむで居た。數株の柿の木も枝も撓わに黃も最早や退一歩の工風せられて北門外にでも引つ越されない限りは、閑境に安居を有せられること

景氣の話

岡村介石

好景氣は、望ましいことである。しかし私は、不景氣も亦捨てたものではないと思つて居る。

○

景氣がいゝと、男子の品行が著しく惡くなる。これは、私のところへ見える夫人方の、涙ながらの告白でほゞ亂行の一端を知つて居る。うかれるのである。調子に乘るのである。放心の態容である。而して風俗は著しく頹廢する。

○

不景氣は、家々を破滅に導く、生活難を製造する。もとより咀ふ可きである。しかしそれは、資産上のことであつて、夫婦愛、親子愛は、少しも傷つけられないのみか、却つてその窮迫いよ〳〵強うして、結合益々堅しの觀がある。食ふにこまつて、一家七八名相擁して、河に投じた——生存的には敗れたのである。されど夫婦愛、親子愛に於ては、完き終りを結んだのである。

○

で、不景氣も、長く續いては困るが、それは好景氣も同樣だ。そして、この二つが互に、循環するところに語弊があるかも知らんが私は深き天意の存在を見る

おぼえ帖

石川利夫

◎或る川柳雜誌が、廣告代りにと、ちゝぶやの堀内さんを攻めて生れて初て作らせた川柳といふのが、次のやうなものだ。題は『銘仙と毛絲』である。

○質實さけぶ、壇上の女史銘仙の振袖で

○毛糸服、著た女學生の足のふとさ

○あむ絲の、玉に小猫のぢやれ廻はり

○柄の派手を、嫁入前のものと言ひ罵し

◎三中井の中江さんは、平生杯をあげて、面白いことをいつて、そして、論をうたつて居る人と思ふと、どうして〳〵、よく旅行する人だが、行く先き〳〵で歌をつくる。近年詠んだものだけでも、ノートに何冊とある。やつぱり一事にすぐれた人は萬事に凡でない

◎三中井月報といふものがある。店内の月刊雜誌である。奬勵して店の人達に書かせて居る。そして之は一ツのメンタルテストで、文に依つてその質を知り、それ〳〵適所に配合するのが目的だとある。面白いぢやないか。

◎前田少將、庭木の手入が何よりのお樂みらしい。閑さへあれば筒ッぽか何んかの粗服で、一日こそ〳〵やつて居られる。ところが佛教團、青年聯合會と、次ぎ〳〵に用事がふえて、その上、東京、大阪と出張せねばならぬ『これだけのものを、植木屋に托して行くのが心元ない……』それほど、樂みはふかいものらしい。

【四七】

朝鮮へ賣られ行く女

伊藤　龍

薄墨を流した樣な空模樣であつた。曇つて居た。雲行きの按配を推察して見て、晝間行く連絡船でも、玄海灘の沖合に差し掛かつたら、暴れを喰はされやしないだらうか、船暈に抵抗力の乏しい人達には、豫めの憂ひに心を痛めたであらう。今にも俄か雨を誘ふやうな眞黑な雲が走つて來た。冷やかな風が吹いて來た。でも、なか〳〵雨が降つて來ない。

× × ×

釜山行の待合室は、船の出發を待つ人群で混雜を呈して居た。勞働者風の鮮人達や、見すぼらしい稼人達で、腰掛は殆んど占領されて居た。

待合室の窓を透じて、直ぐ眼前に今著いたばかしの門司丸を見た。船樣の鐵格子を船員が開けた。どか〳〵と乘船客が出て來て、吾れ先きに競ふが如く足を運ばせて、出口の方へ急いで行く。足音、話し聲、船荷の積おろし、荷物の運搬車の軋る音人夫の掛け聲、喧噪の極みであつた。

× × ×

待合室の中は、空氣の流通の乏しい故か蒸し暑い感じがした天候の加減で薄暗かつた。

横手の入口から這入つて右側に朝鮮銀行紙幣兌換所が在る。小窓が三つ程あつて板戸で固く閉されて居た。直ぐ其前の腰掛に三人連れの若い女が腰を下して居た。同年輩らしい。言葉も餘り交はさないで、人目を恥らう樣に、やゝ俯向き勝であつた。勿論數多の待合客の内で、この三人を除いては際立つて人目を惹くほどの女は居なかつた故だらうが、とかく視線が、三人の女を中心として集り勝であつた。其側に三十四五歳位の色の淺黑い、眼の鋭い男が居た。頭髮は職人風に刈つて、荒縞の浴衣を著て、兩袖を捲くり上げ、筋肉の締りいゝ腕を不躾氣に現しながら、バナナをむしや〳〵喰つて居た。時々鋭い眼から射る一瞥を女達の方に送り、頬張つた口元に非人間的の嘲りが、脅威を示す刻みを造つて居た。女は三人共柄行きのよくない安價な浴衣がけで、一人だけ唐草模樣を白地で浮かせ紫紺色の絹羽織を著て居た。髮は島田髷で、中結のは白元結で、埃氣が油氣を拔いて、後れ毛が垂れ下がつて櫛で掻き上げ樣ともしない程の無精さを見せて、前鬢だけは黄楊の櫛で掻き上げて居た。顔立は並じやなからう。羽織を著て居た女が、一寸嫖緻好しであつた。薄紫色の洋傘の柄先に、兩手を當てゝ、頤を支へて足元に視線を落して居た。時々袖を捲くつては時計を見て居た。發船時刻が待ち遠しいので、所在のない退屈を覗はせて居た。

バナナを喰い終はつた男は皮を足元に投げ捨て、右足で躙りながら、腰掛の下へ皮を押し遣つた後で、女達の方へ一通り見廻して。

『お前等は感心に、涙一滴零ぼさねいな。先月末に連れて行つたアマチョの若いのに、ベソ〳〵泣き出されてな俺は困つたよ、泣かれる位手古摺る事はありやしない。宥めりや宥める程聲を立てやがつて泣き出すのでな、終ひにや俺も怒鳴りたくなつたさ。可愛そうには違ひないけれど俺も商賣じや仕方がない三度に一度は俺の商賣柄とは云ひながらよ、男泣きに泣く事があるぜ、鬼の眼にも涙つて云ふのだらう。お前等は別段に悲しい面持も見せねいから俺は有難いわけさ。いくら朝鮮だからと云つたて、地獄の底へ行く譯じやなし、やはり生きて居る人間の世界だから、心配は要るまいさ。年決めでゆくのだから、辛棒してさ、年期さへ明けりや、大威張りで歸るれるのさ。賣られてゆく女も辛からうが連れてゆく俺も嫌だぜ。喰ふための世渡りだ。あきらめが肝心だよ。斯うやつて一緒に旅連れになるのも、なんかの因緣づくだらうまあ旅稼のつもりでな、なアに悲しい事なんかありやしない。度胸さへ据へてりや、世の中に恐しいものなんかねえよ。京城つて所はよ、内地の大概の人はどんな田舎か、野蠻の土地へでも行く樣に思ふか知れねえが、なか〳〵立派な都會だぜ。お前等の行く先は京城の町端れに、廓つて云へば廓見たいの所だが

まア醫妓屋町見たいの所だよ。なか〳〵賑かなもんだぜ。新町と云ふ所さ。内地のくだらない田舎町の廓よりていしたもんさ。それにね、殖民地だけにな、樓主よりも抱妓の方をな、警察が保護して居るのだから慘めな思なんかしたくも出來ないから安心するがいゝや。お前等が今まで稼いで居た所よりはずつといゝぜ。一寸マッチを貸しな』

三人の女は默つて首肯く樣に聞いて居た。洋傘に手を當てゝ居た女は、頭を擡げて袂からマッチ取り出して渡そうとすると男は懷中に手を突込み探る樣にして、朝日を一本指先で撮みながら取り出して。

『濟まねえが、火をつけて呉れねいか』

女は素直に火を著けて、自分も煙草を出して口に銜へて、火を著けた。

他の女達は申合はせた樣に、

『あッ、妾にも一本……』

× × ×

上船の時刻も間近くなつた、待合室に長らく待ち疲れた人達は、ぞろ〳〵ホームへ出てゆく。便所の側のホームの柱と貨物線へ寄つた方の柱とに太繩を張つて、上船客の混雜を避けて居た。

午前九時半、警戒の繩が解かれた。上船客は傍目も觸らずにわれも〳〵と。船の方へ急いだ

× × ×

『おい、お前等の荷物は、自分〳〵で仕末するのだよ。いゝか。これが書の辨當だ。三つある。俺のは俺が持つてゆくから離れ〳〵にゆかないで、俺の後について來いよ』

男は女達を半ば急立てるやうに語氣荒く云つた。女達は男の云ふが儘に、充分の服從から命令通りに、自分等の運びをつけた。――やがて、彼等の姿は、群集の裡に附け加へられた。

謹みて御禮

河西さち

其の後は何かと忙しきに取りまぎれ、つい御無沙汰いたして誠に申譯ありませんでした、此度はおたよりをいたゞきまして有難うございました、十五日、二十七日には皆樣開敎院にお集り下さいまして懇ろなる追悼會を御催し下さいましたる由、深く御禮申上げます

喜雄在世中は一方ならぬ御世話に相成りましたる上親樣にもなつていたゞきましたることにて深く感謝いたして居ります、喜雄亡き後はかほる、基子も心淋しく暮し居ることと思ひますれば何卒何かと御引立て下さいまする樣おねがい申し上げます。

わたくしとても喜雄をたよりの三十年間でありましたが、あの子亡き後はなすこともなくなりたる樣覺えます、今はかほる、基子を心頼みに致すばかりであります、何もかも夢の樣に思はれ運命と諦めるより外致し方もありません、生前は申す迄もなく死後までも皆樣の御厚情を蒙りましたことを何よりのことと今は思つてをります。

九月三十日　信州上諏訪町上柳町にて

無一物

永樂町人

いが、日本のものは、その總生産の量と、質とを合せても、果してあの酒くらいの、詩人の李白ほどのちの世界へ、とこしへに遺るかドウか、疑問だから心細い。

〃畢竟、過去の日本人は、何をしてゐたのか——。

◎

日本髪の造構——丸髷や、高島田の形態、考案は、外人に奇異な日本人の頭腦を、印象するばかりだ。このみがヒネクれて、手はこんで居るだらうが、世界的な光明さと、簡潔さとがない。それが其象的なれば、なるほど、世界的需要心理から、いよ〳〵陶汰せらるべき必然性がある。島人の仕事は大底そんな暗闇への空しい努力だつたから堪まらぬ。

◎

過去を、ふり返ると、氣がふさいで來る。イヤになつてしまふ。けふは、これだけのことを、書いて置かう。

浮世繪、扇子！、先づそんなものか。三千年の歴史も、生死幾億の生靈の造構力も、たゞそれだけのものであつたか。鎌足何處にありや。太閤何處に在りや。南洲先生健在なりや。日本を世界に問ふとすれば、殆んど人も、物もないから寂しい。

◎

どこの外國人が、物好きに日本語を學んでくれる。どこのお洒落の外國婦人が、日本のふり袖を著てくれる。そして、どこの好學の外人が、日本の國學——和歌や和文を、研究してくれる。支那のものには、永遠のいのちがあるらしい。

京城雜筆

◎

野球が流行する。相撲なんか何處にどうなつたか、影も形も見へない——といふ落ちぶれ方である

◎

支那の遊戯の麻雀が流行る。今に、將棋や圍碁は、よく〳〵の舊人でないと、そのうち方さへ知らないことになるだらう。

◎

今のところ、謠や長唄が流行つてゐるが、これも何年持てることか。洋樂がキット取つて替るだらう。

◎

世界のいゝもの、悪いもの、總てが日本に這入る。そして、古いものを根こそぎ打枯らして、新しいものが日本の土を占める。日本かぎりの生活といふものは、許されない。隨つて生活樣式、遊戯樣式も世界的となる。よし、あしの議論の餘地はない。時の勢ひである。人々は、好まずとも、洋服を著、西洋館で、事務をとつて居ると同一である。世界は、一つの世帶となる運動を、今しきつと繼續して居る。

◎

日本在來のもので、世界に問ふべきもの、何がありや。未來の世界へ、光りとなるべきもの、日本に何がありや。我々の愛國心は、時々それを反省したくなる。絹布うか、日光浴をなしつゝ仕

寄稿家へ御願ひ

來る十二月號は、いつもと同樣、同月一日發行いたしますが、その十二月のうちに、次の正月號も——大底暮の二十七八日までに、發行いたさなければなりません。それで

十二月號原稿 十一月十日締切

正月號原稿 十一月二十日締切

と豫定致して居ります。仲々多忙です。で、社員原稿御願にあがりました節は、どうか本誌御後援の意味で、快く御執筆御承諾のほど、吳々も御願申上げます（雜筆編輯部）

◎篠田博士が、思ひよらず、東京から『芝居見物』をお送り下す

に何がありや。我々の愛國心は、時々それを反省したくなる。絹布

日光浴記

北岳山人

病軀何をなすにも懶く、天氣さへよければ書は南の緣側にねそべつて日光浴に時を過ごす。私に取つて此頃の最大親友は太陽である太陽のあたゝかい直射を受けつゝ何を考へるともなくぼんやりとねころんで時の還るに任せるのは至極呑氣でよい。

○

かうした境涯の中で、最近は法華經を二度ばかり繰返して讀んで見た。毎日ほんの少しづゝ讀んで前後一月ばかりもかゝつたであらうか、日光浴をなしつゝ仕上げた課業としては、これが近頃の最も著しいものである。難解なる經文は私等のやうな門外漢に明確に了解出來やう筈もなく、あだかも霞を隔てゝ花の林を望んだやうなものであるが、低く音讀してゐると何だか心が澄んで來て、釋迦牟尼佛の面影がおぼろげに描き出されたり、觀世音菩薩の妙智力を讃歎するやうな氣持にもなる。私のやうな無宗教無信仰の者にも神秘幽玄な世界に憧るゝ靈のさゝやきはあるのである。一度讀み終つて、更に又一回讀み返して見やうと思ひ立つたのも、病める私の心に或る宗教的な欲求があつたからに相違ない。

◎篠田博士が、思ひよらず、東京から『芝居見物』をお送り下すつたのは、大助かりでした。

◎木浦福田有造氏から、河西君の遺稿を、出版するやうなら、自分も應分のことはしたいと申し送られました。角田氏（京日）とも篤と談合するつもりで居ります。

◎天、やうやく寒さに向ひます何處かもう少し便利なところがあつたら、引越さうと思ひつゝ、どうやら今年も經つてしまいさうです。皆さまの御自愛を禱つて、筆を擱きませう。

編輯後記

編輯同人

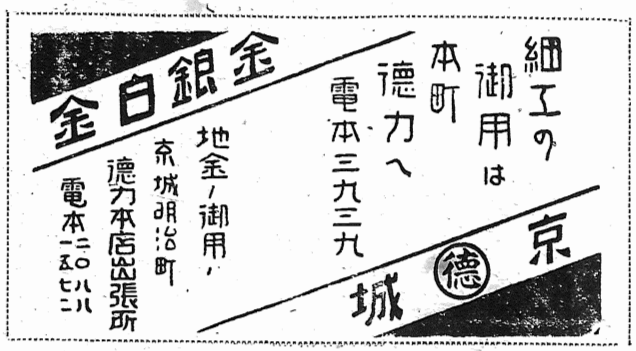
◎行數の都合で、廣田博士の『戻り路』市山盛雄氏の『歌の話』等みだしを小さくしましたことを、お詫び申します。

◎市村毅氏の『南洋漫筆』も、五六行だけ次の頁へハミ出します。體裁が面白くないので、それだけ削らして頂きました。併せてお詫び申上げます。

◎山口銀行の田口さん、本號へは乾度稿を寄せらるゝ約束のところ、十七日急遽内地行。少なからず落膽しました。最も次號には、間違なく、内地土産に何か大に麗筆を揮はるゝ筈。

◎手紙を出すと、東京の丸山さんから、スグ稿を送られる。いつもながら後進に厚いのは、感銘の外はない。

◎十二月號は、十二月一日發行いたします。それ故、同號の原稿は（いつもの通り）十一月十日までに、頂戴いたしたく、尙ほ正月號は（どの雜誌も、大底さうであるやうに）年内の二十七八日に發刊いたしますから、十二月には、二ッの雜誌を作ることになります。そして、正月號の稿は、十一月十五日、おそくも二十日には、頂きたいと思ひます。奮つて御援助を祈りあげます。



大正十四年十月三十日印刷
大正十四年十一月一日發行
一部定價金四十五錢
京城府和泉町一六四
發行兼編輯人 松本武正
印刷人 石川利夫
印刷所 京城日報社
京城府和泉町一六四
發行所 京城雜筆社
電話光化門三〇六番

時計と金貴屬

正確
堅牢

型新最く置をき重に牢堅械機
卒何候居揃取富豊種各品級高
候上願に偏度り賜付仰命用御

貴金屬裝身具の御用は何卒
村木へ御申付希上候
優秀なる技工と
確實なる品質は
村木の貴金屬の
生命です
村木の裝身具
は常に帝都の
粹を抜いてゐ
ます

!!よれらめ求を計時るな確正は方ゝるさ重尊を時
!!へ店商る有用信は方ゝるらめ求を品商るな實確

京城本町二丁目
標準時計
村木時計店
電話本局(四七一)(三一六六)
振替京城三一九〇

弊店は去る六月十日時の記念に際し時の功勞者
として東京生活改善同盟會長伊藤博邦公より表
彰され同時に表彰狀拜受の光榮に浴しました

樂器と蓄音器

獨乙高級ピアノ
山葉ピアノ、オルガン
鈴木製
ヴアイオリン、マンドリン
獨乙製
ウアイオリン、マントリン
內外管樂器一切
內外蓄音器
內外レコード（日蓄、日東、內外ウインナー）
內外音樂書
樂器附屬品一切
運動具一式
（目錄無料進呈）

京城本町二丁目二十九

釘本洋樂器店

電話一二八三番

朝鮮讀本（新刊定價五十錢）

民族讀本（新刊定價五十錢）

發行所 大陸通信社

電話本局一九九番

秋向背廣服
同オーバ
レインコート
新地質續々着荷
仕立念入り價格は安い
經濟的理想の既製品頗る豐富
▲御注文に應じ特製仕候
京城鍾路一ノ一九
角田洋服店
電話光化門九五五番
振替京城一八四三番

朝鮮商工株式會社

本社　鎭南浦三和町

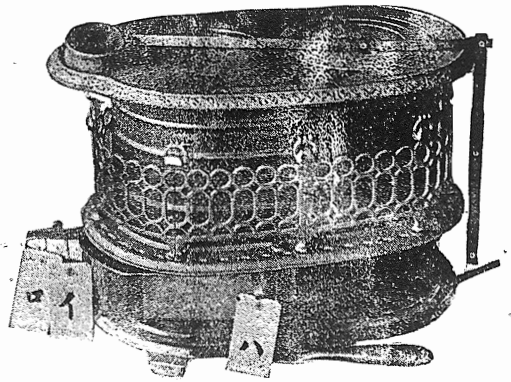
哈拉回族

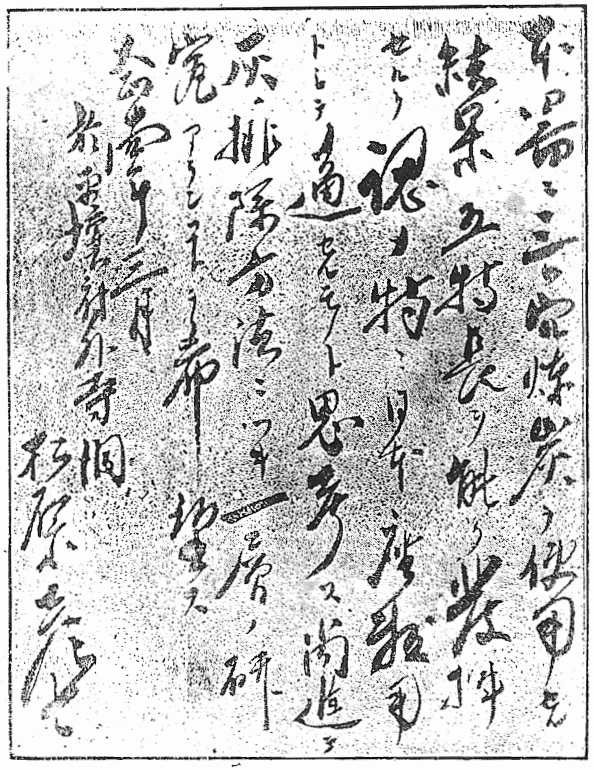
富永式特許暖爐

一、奇麗で、品が良くて、わづかな燃料で、それで火力が強いのが富永式ストーブの特色！。

二、御飯も炊ければ、同時にお菜も煮ることが出來る。

三、實物を御覧下さい、御納得が行きます。第一號金貳拾五圓、二號（イ）貳拾貳圓（ロ）拾六圓。





京城本町二丁目

青々園茶舗

電話本局一一一一番

◎銘仙と
毛糸◎

京城本町
ちゝ姫や

堀内滿輔

電話本局
八五五
九〇〇
〇六五
番番

◎多少に拘らず御用命
の程を願ひ上げます

京城雜筆（第八十一號）

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十四年十一月一日發行（毎月一回一日發行）